

42135

教科書文庫

4
810
42-1915
20060 42081

Kodak Gray Scale

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

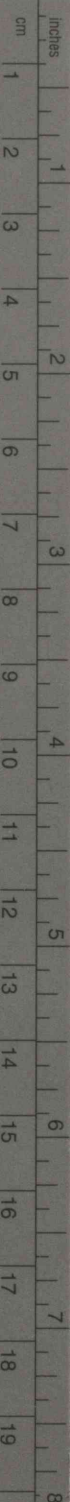


© Kodak, 2007 TM: Kodak

Kodak Color Control Patches

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black

© Kodak, 2007 TM: Kodak



3759  
HAR  
資料室

訂改新定女子讀本 卷一





校學女等高 濟定檢省部文 年四正 大  
書用科教科語國 日九十月一

文學博士芳賀矢一編



訂改 新定女子讀本



東京

富山房發兌

訂改 新定女子讀本

卷八 目次

- 一 秋の夜の針仕事
- 二 太平記(落花の雪)
- 三 太平記(櫻井の驛)
- 四 楠公論
- 五 神皇正統記(入臣の道)
- 六 忠義の二字
- 七 霜の美
- 八 身の分限

極口葉理付 左京又選

16  
11  
21  
24  
18  
31  
151

三 三 七 三 六 二 三 一

目次



〇	九	宇治拾遺物語(五色の鹿の事)	四三
一〇	宇治拾遺物語(莊子畜類を見て逃走しし話)	四七	
一一	川柳點	五〇	
一二	人の過失	五四	
一三	長谷寺詣	六〇	
一四	方丈の室	六七	
一五	宮城御移轉の記	七三	
一六	小野の深雪	七九	
一七	をりふしの雨	八六	
一八	野村望東尼	九一	
一九	高嶺秀夫君を祭る文	九七	

〇	二〇	色彩	一〇〇
〇	二一	謠曲(羽衣)	一〇七
〇	二二	音樂	一一五
〇	二三	我が國の繪畫(その二)	一二三
〇	二四	我が國の繪畫(その一)	一二四
〇	二五	義經記(主従の別)	一二九
〇	二六	俳句の感興	一三五
〇	二七	社會と家庭	一四〇
〇	二八	某女學校生徒の卒業を祝ふ文	一四六



目次終

改訂新定女子讀本卷八



文學博士 芳賀矢一編

一 秋の夜の針仕事

庭の芭蕉のいと高やかに延びて、葉は垣根の上やがて  
 五尺もこえつべし。今歳はいかなれば、かくいつまでも丈  
 のひくきなど言ひてしを、夏の末つかた極めて暑かりし  
 に、唯一日、二日、三日とも數へずして、驚くばかりになりぬ。  
 秋風少しそよくとすれば、端のかたよりはかなげに  
 破れて、風情次第に淋しくなるほど、雨の夜の音なひ、これ

端の方より  
はかなげに  
破れて

一 秋の夜の針仕事

一



こそは哀れなれ。

こまかき雨はばらくと音して、叢がくれ鳴くこほろぎのふしをも亂さず、風一しきり颯と降り來るは、彼の葉にばかり懸るかといたまし。雨は何時もあはれなる中に、秋はまして身にしむこと多かり。

疊紙

更けゆくまゝに、燈火のかけなど、うら淋しく、寝られぬ

衾先

日參

夜なれば、臥床に入らんも詮なしとて、小切入れたる疊紙とり出し、何とはなしに針をも取られぬ。いまだ幼くて伯母なる人に縫物ならひつる頃、衾先、衾の形など、むづかしう言はれし、いと恥づかしうて、これ習ひ得ざらんほどはと、家に近き某の社に日參といふことをぞなしける。おも

昔なりけり

へばそれも昔なりけり。をしへし人は苔の下になりて、習ひとりし身は大方もの忘れしつ。かくたまさかに取出づるにも、指の先こはきやうにて、はかましうは得も縫ひがたきを、彼の人あらば、如何ばかり言ふ甲斐なく淺ましと思ふらんなど、打返しそのむかしの戀しうて、そゝるに袖もぬれそふ心地す。

遠くより音して歩み來るやうなる雨、近き板戸にうちつけの騒がしさ、いづれも淋しからぬかは。老いたる親の瘦せたる肩もむとて、骨の手に當りたるも、かゝる夜はいと、心細さのやる方なし。

(樋口一葉、現代名家文選より)



二 太平記―落花の雪

(一)又や見ん交野のみ野のさくら春の曙  
(新古今集、藤原後成)  
(二)河内國北河内郡  
(三)朝まだき嵐の風のさむければ紅葉の錦  
(拾遺集、藤原公任)

落花の雪に踏みまよふ、交野の春の櫻がり、紅葉の錦着て歸る、嵐の山の秋の暮、一夜をあかすほどだにも、旅寝となれば物うきに、恩愛のちぎり淺からぬ、我がふるさとの妻子をば、行くへも知らずおもひおき、年久しくも住馴れし、九重の帝都をば、今をかぎりとかへりみて、思はぬ旅にいでたまふ、心のうちぞあはれなる。  
うきをば止めぬ逢坂の、關の清水に袖ぬれて、末は山路をうちでの濱、沖を遙に見わたせば、潮ならぬ海にこがれ行く、身をうき舟のうきしづみ、駒もとどろと踏鳴らす、勢

(四)近江滋賀にあり  
(五)貢物たえずそなふる東路

の勢多の長橋音もとどろに、(風雅集、平兼盛)  
(六)近江路を朝たち來ればうれの野に田鶴ぞなくなる明は、(古今集、大歌所の歌)  
(七)白露も時雨の下の葉のこらし色づきにけり、(古今集、紀貫之)

(八)人住まぬ不破の關屋の板底荒れにし後、(新古今集、藤原長經)  
(九)打ちわたす今か鹽干になるみ潟となよる舟の聲も通はず、(夫木抄、常磐井入道)

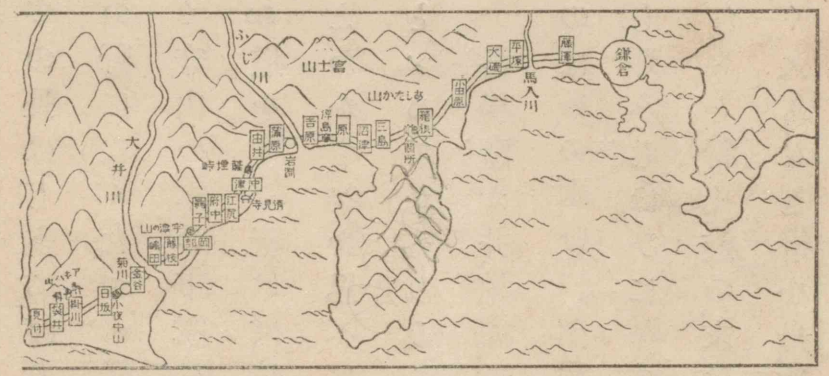
多の長はしうち渡り、行きかふ人にあふみ路や、世をうねの野になくたづも、子を思ふかとあはれなり、時雨もいたく守山の、木の下露に袖ぬれて、風に露ちる篠原や、笹わくる道をすぎ行けば、鏡の山はありとても、涙にくもりて見えわかず、物を思へば夜のまにも、老その森の下草に、駒をとめてかへりみる、故郷を雲や隔つらん。  
番場醒が井、柏原、不破の關屋は荒れはてて、なほもるものは秋の雨、いつかわが身のをはりなる、熱田の八つるぎ伏し拜み、しほひに今や鳴海瀉、傾く月に道見えて、明けぬ暮れぬと行く道の、末はいつくと遠江、濱名の橋の夕汐に、ひく人もなき捨小舟、沈みはてぬる身にしあれば、誰かあは

捨小舟

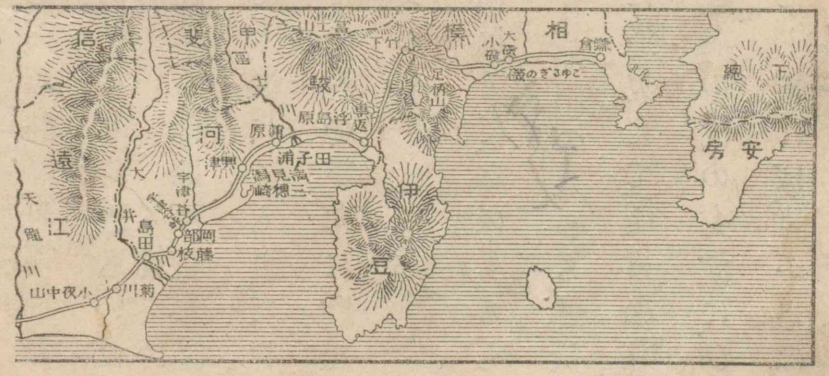


沈みはてぬ  
る身

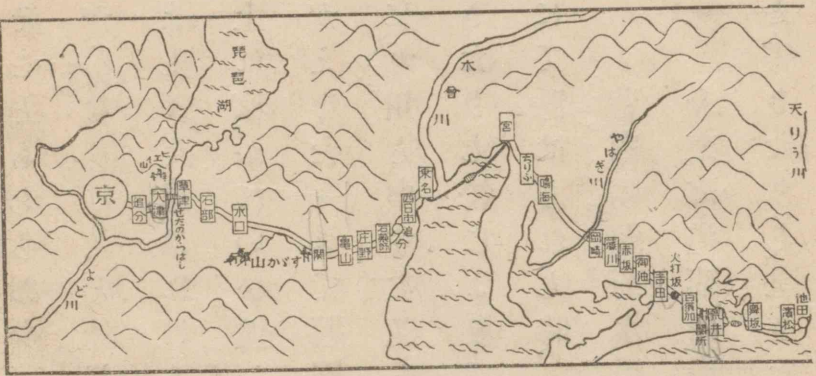
(一) 遠江國天  
龍川の東岸に  
あり。古は西  
岸にありき。  
(二) 後鳥羽天  
皇の年號。



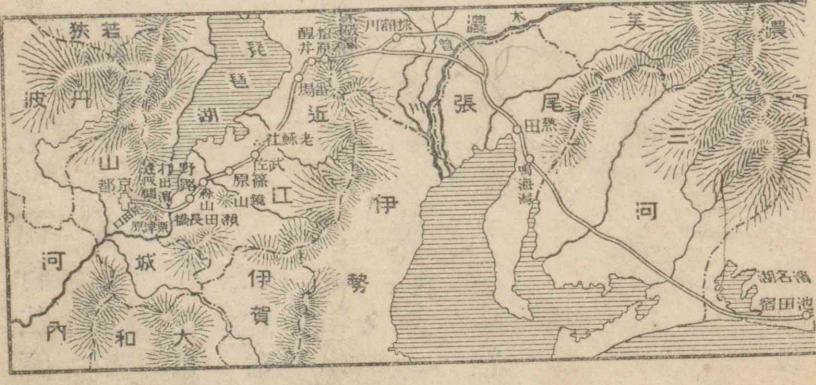
れと夕暮の、入  
相なれば今は  
とて、池田の宿  
につき給ふ。  
元暦<sup>(二)</sup>元年の  
頃か。とよ。重衡  
の中將の、東夷  
の爲に捕はれ  
て、この宿にや  
どり給ひにし、  
そのいにしへ



いばえて



の哀れまでも、  
思ひ残さぬ涙  
なり。旅館の燈  
かすかにして、  
雞鳴曉を催せ  
ば、匹馬風にい  
ばえて、天龍川  
をうち渡り、小  
夜の中山越え  
行けば、白雲道  
をうづみ來て、





復(一)もひきや命(二)なりけり(三)小夜今集、西行法

原郡菊川國様(一)承久三年(二)仲恭帝の

そこともしらぬ夕暮に、家郷の天を望みても、昔西行法師が、命(一)なりけり。」と詠じつゝ、二たび越えし跡までも、うらやましくぞ思はれける。隙ゆく駒の足早み、日すでに亭午(二)に上れば、かれいひ進むるほどとて、輿を前庭にかき止む。ながえをたゞきて警固の武士を近づけ、宿の名を問ひ給ふに、菊川(一)と申すなり。」と答へければ、承久(二)の合戦の時、院宣かきたりし咎によりて、光親卿關東へ召下されしが、この宿にて誅せられし時、  
昔南陽縣、菊水、汲下流而延齡。  
今東海道、菊川、宿西岸而終命。  
と書きたりし、遠きむかしの筆の跡、いまはわが身の上

なり、あはれやいと、まさりけん、一首の歌を詠じて、宿の柱にぞかゝれける。

古もかゝるためしをきくがはの

おなじながれに身をや沈めん

大井川をすぎ給へば、都にありし名を聞きて、龜山殿の行幸の、嵐の山の花盛り、龍頭鷄首の舟に乗り、詩歌管絃の宴に侍りしことも、今は二たび見ぬ夢となりぬと思ひつづけ給ふ。

島田(一)藤枝にかゝりて、岡(二)への眞葛うら枯れて、もの悲しき夕暮に、宇都の山べを越え行けば、蔦、楓いと茂りて道もなし。昔業平中將の、すみかを求めんとて、東の方へ下り

駿河國志太郡(一)にあり。歸り來る程はなけれど、朝露の岡邊の眞葛うら枯れの爲にけり。(二)藤原



年々  
あつた  
櫻井

(一七)駿河なる  
うついに夢  
のにも人にあ  
はなりけり。  
(伊勢物語)  
(一八)駒とめて  
過ぎそやちれ  
ぬ清見濁ちり  
し関守。(風雅  
集法橋顯昭)

(一九)富士の根  
の煙はなほそ  
立ちのぼる上  
なき者はおも  
ひなりけり。  
(新古今集、家  
隆)

(二〇)こゆるぎ  
のいそぢちな  
めらし磯菜つむ  
らざしぬらす  
な沖に居れ  
相模歌。(古今集、  
相模歌)  
(二一)後醍醐天  
皇の元弘元年  
洛す。

しに、夢にも人にあはぬなりけり。とよみたりしも、かくや  
と思ひ知られたり。  
清見がたを過ぎ給へば、都にかへる夢をさへ、通さぬ波  
の關守に、いと、涙を催され、むかひはいつこ三保が崎、興  
津、蒲原うちすぎて、ふじの高根を見給へば、雪の中より立  
つ煙、上なき思にくらべつ、明くる霞に松見えて、浮島が  
原を過行けば、しほひや淺き舟みえて、おりたつ田子のみ  
づからも、うき世をめぐる車がへし、竹の下道ゆきなやむ、  
足柄山のたうげより、大磯小磯見おろして、袖にも波はこ  
ゆるぎの、いそぐとしもはなけれども、日數積れば七月二  
十六日の暮ほどに、鎌倉にこそ着きたまひけれ。

三 太平記 櫻井の驛

(二)後醍醐天皇  
の延元元年  
九月六日  
洛す。上  
軍を率して  
洛す。

尊氏卿、直義朝臣、大勢を率して上洛の間、要害の地に於  
て防ぎ戦はん爲に、兵庫に引退きぬる由、義貞朝臣早馬を  
進めて、内裏に奏聞ありければ、主上大いに御騒ぎあつて、  
楠木判官正成を召されて、急ぎ兵庫に罷り下り、義貞に力  
を合せて合戦すべし。と仰せられければ、正成畏つて奏し  
けるは、尊氏卿已に筑紫九國の勢を率して上洛候なれば、  
定めて勢は雲霞の如くにぞ候ふらん。御方の疲れたる小  
勢を以て、敵の機に乗りたる大勢に懸合せて、尋常の如く  
に合戦を致し候はば、御方決定打負け候ひなんと覺え候



搦手

料簡

なれば、新田殿をもたゞ京都へ召し候て、前の如く山門へ臨幸成り候ふべし。正成も河内に罷りくだり候て、畿内の勢を以て河尻を差塞ぎ、兩方より京都を攻めて、兵糧をつからかし候程ならば、敵は次第に疲れて落下り、御方は日に随つて馳集り候ふべし。其の時に當つて、新田殿は山門より押寄せられ、正成は搦手にて攻上り候はば、朝敵を一戦に滅さんこと、有りぬと覺え候。新田殿も定めて此の料簡候ひなん。たゞ路次にて一軍もせざらんは、無下に云ふ甲斐無く、人の思はんずる所を恥ちて、兵庫に支へられたりと覺え候。合戦はとてかくても、始終の勝こそ肝要にて候へ。よくく遠慮を廻されて、公議を定めらるべき

僉議

二坊門に家あり、故に坊門は左大辨參議なり。

節度使

三延元元年正月、尊氏の上行洛をさきて幸あり。

にて候。」と勅答せられけり。  
 されば列座の諸卿いづれも、誠に軍旅の事は兵に譲られよ。」と僉議有りけるに、重ねて坊門宰相清忠申されけるは、正成が申す所も其の謂ありといへども、征伐の爲に差下されたる節度使、未だ戦を爲さざる前に、帝都を捨てて一年の内に二度まで山門へ臨幸なさん事、且は帝位の輕きに似、又は官軍の道を失ふ處なり。たとひ尊氏筑紫勢を率して上洛すとも、去年東八箇國を順へて上りし時の勢にはよも過ぎじ。凡そ戦の始より敵軍敗北の時に至るまで、御方小勢なりといへども、毎度大敵を攻靡かせずといふことなし。これ全く武略の勝れたる所にはあらず。只聖



鉄鉞

運の天に叶へるゆるなり。然れば只戰を帝都の外に決して、敵を鉄鉞の下に滅さんこと、何の仔細かあるべきなれば、只時を替へず、楠木罷り下るべし」とぞ仰せ出されける。正成、此の上はさのみ異議を申すに及ばず」とて、五月十六日に都を立ちて、五百餘騎にて兵庫へぞ下りける。正成之を最後の合戦と思ひければ、嫡子正行が今年十一歳にて供したりけるを、思ふ様有りとして、櫻井の宿より河内へ返し遣はすとて、庭訓を残しけるは、獅子子を産んで三日を經る時、數千丈の石壁より之を擲ぐ。其の子獅子の氣分あれば、教へざるに宙より跳返りて、死なずといへり。況や汝己に十歳に餘りぬ。一言耳に留らば、我が教誡に違ふこ

庭訓

宙

若黨

(四)河内國南河内郡

(五)支那古代の名人。百歩の外に柳葉を射て、百步中すといふ。  
 (六)漢高祖の臣。高祖項羽に圍まれ、紀信高祖と偽つて、高祖を助け、身代となつた。  
 (七)秦穆公に仕ふ百里奚の子。  
 (八)百里奚の子。

となかれ。今度の合戦天下の安否と思ふ間、今生にて汝が顔を見んこと、之を限りと思ふなり。正成己に討死すと聞きなば、天下は必ず將軍の代に成りなんと覺えたり。さりともし一旦の身命を助からん爲に、多年の忠烈を失うて降人に出づることあるべからず。一族若黨の一人も死残りてあらん程は、金剛山の邊に引籠つて、敵寄せ來らば命を養由が矢さきに懸けて、義を紀信が忠に比すべし。是ぞ汝が第一の孝行ならんずる」と泣くく申し含めて、各東西へ別れにけり。

昔の百里奚は、穆公晉の國を伐ちし時、戰の利無からんことを鑒みて、其の將孟明視に向うて、今を限りの別を悲



皇外史  
政記

良弼

一揆

しみ、今の楠木判官は、敵軍都の西に近づく<sup>と</sup>聞きしより、國必ず滅びん事を愁ひて、其の子正行を留めて、無き後迄の義を勸む。彼は異國の良弼、是は吾が朝の忠臣、千載を隔つといへども、前聖後聖一揆にして、有難かりし賢佐なり。

#### 四 楠公論

我屢攝播の間を往來し、一日櫻井の驛をば山崎の道に訪へり。見るかげもなき小村にて、旅客或は其の驛址たるを知らずして過ぎんほどの處なり。思ふに足利、織、豊數氏の代を経て、世の中うつりかはるがまゝに、道里、驛程亦随つて改りしにこそ。我其處に到つて低回去ること能はず。

驛址

干城

（一）正成は檢非違使、内左衛門守、河内守、兼河内守、泉守、河内守、判官、戦死、左近衛、賜、近衛、時、贈、代、に、ら、る、を、一、明、治、位、

値遇

虚を擣く

且遙に金剛山の雲際に聳ゆるを望み見て、公及び其の子孫の據りて以て長く王室の干城たりし事を憶ひ起して、胸中の感慨禁ずること能はざりき。さて公の行在所に詣り、臣幸にして生きて有りと聞き召さば、賊勢いかに熾なりとも、願はくは叡慮を安んぜさせたまへ。と奏せしを見れば、身はこれ一兵衛（一）の小職にありながら、天下の責任をば一身に負ひたるを察すべし。蓋し公は帝の値遇（一）に感ずるの餘り、身をすてて國家の爲に盡さんと期したるもの、意氣壯なりといふべし。はじめ公の金剛山に據るや、北條高時天下の精銳をやりて之を圍めり。是を以て新田、足利二氏其の虚を擣いて、



(二)結城宗廣、  
名和長年

犬羊狐鼠の  
賊

畫策

たやすく鎌倉を滅すことを得たり。されば論功行賞の時、  
公の勳功宜しく武臣の第一位におくべきに、朝廷公を待  
つに結城、名和の輩と僅かに肩を比べしめしのみ。これ甚  
だしき失態にして、中興の業の成らんとして成らざりし  
もの、故なきに非ず。尋いで尊氏の叛するや、朝廷又深く新  
田氏をたのみ、公を其の部下に屬せしめしに過ぎず。蓋し  
公の門地の新田氏に及ばざるが故なるなからんや。然れ  
ども大いに京師に克ち、尊氏をして西海の果に走らしめ  
しは、一として公の畫策にあらざるはなし。よりて思ふに、  
はじめ新田氏の如き榮職を以て公に授け、公をして自由  
に其の力を揮はしめば、彼の犬羊狐鼠の賊をして我が朝

良弼

彈丸黒子の  
地



廷を踐ましむるが如き淺猿しき事の斷じて無かりしな  
らんを、惜しみても尙あまりあることなりけり。尊氏の大  
舉して東上するや、公は其の子正行を諭して河内に歸ら  
しめんとて、我死なば天下悉く  
頼尊氏に歸せん。といへり。あゝ今  
山は天下の如何とも爲すべから  
陽ざるを知りつゝも、尙其の子孫  
を留めて、飽く迄も天子を衛ら  
んとせり。其の心を用ふるの深くして遠き、古今の良弼と  
いへども決して及び易からず。子孫亦よく遺訓を守り、正  
統の天子を彈丸黒子の地に守護し、四海の寇賊を防ぎし



（三）後醍醐、後村上の三朝五十七年間

肝腦

こと三朝（三）五十餘年の久しきに及べり。誠に一門の肝腦をあげて國家の難に殉なげぜるなり。此の故に足利氏も楠木氏滅亡するに至るまでは大いに天下に伸ぶること能はざりき。然るに世の中興の諸將を論ずる者、亦當時の見と等しく、たゞ門地官位の高下を見るのみにして、深く其の實を量るなきは悲しいかな。

遺孽 南風競はず  
（四）後龜山天皇の明德三年

あゝ楠公無かりせば、三神器ありとも、はた何處に託して天下四方の望を繋がん。笠置の夢想、是に於てか益驗ありき。然るに南風競はず、本幹倒れ、遺孽枯れて、楠木氏の一族遂に亡びぬ。天下の悲惨、豈之に過ぐるものあらんや。然りといへども、南北（四）兩統其の後一に歸して皇基爰（三）に確立

（二〇五二）間十月五日、後小松天皇に神璽ふを授けたまふを授けたまふ

巍然

し、連綿として天地と其の久しきを争はんとす。公の靈もし之を知るあらば、又必ずよろこんで瞑（四）すべし。況や其の大節巍然として彼の山河と並び存し、以て大いに世道人心を萬世の下に維持するをや。之をか（五）の姦雄かはるゝ起り、子孫僅かに、數百年にして滅びしものに比すれば、其の結果果して如何。

（賴山陽の漢文に據る）

### 五 神皇正統記—人臣の道

凡そ王土に生れて忠を致し命を捨つるは、人臣の道なり。必ずこれを身の高名と思ふべからず。されど後の人を勵し、その跡を愍（六）びて賞せらるゝは、君の御政なり。下とし



さほひ争ふ

前車の轍

てきほひ争ひ申すべきにあらぬにや。ましてさせる功なくして、過分の望をいたすこと、みづから危うするはしなれど、前車の轍を見ることは、まことにありがたきならひなりけんかし。中古までも、人のさのみ豪強なるをば戒められき。豪強になりぬれば必ず驕る心あり。果して身を滅し、家を失ふためしあれば、戒めらるゝもことわりなり。

制符

鳥羽院の御代にや、諸國の武士の源平の家に屬することを停むべし。といふ制符たびくありき。源平久しく武をとりて仕へしかども、事ある時は宣旨を賜はりて、諸國のつはものを徴し俱しけるに、近代となりてやがてかたらはるゝやから多くなりしによりて、此の制符を下され

にき。果して今までの亂世の基なれば、いひがひなきことになりにけり。

亂るゝはし

この頃の諺には、一度軍にかけあひ、或は家の子、郎從節に死ぬるたぐひもあれば、わが功におきては、日本國を賜へ。もしは、半國を賜はるとも足るべからず。などぞ申すめ。まことにさまで思ふ事にはあらじなれど、やがてこれより亂るゝはしともなり、また朝威のかるゝしきも推量らるゝものなり。言語は君子の樞機なり。ともいへり。あからさまにも君を蔑にし、人に驕ることはあるまじき事にこそ。堅き氷は霜をふむよりいたる。ならひなれば、亂臣賊子といふものは、そのはじめ心詞を慎まざるより出で



末世

五臟六腑

くるなり。世の中の衰ふると申すは、日月の光の變るにも  
 あらず。草木の色の改るにもあらず。人の心のあしくなり  
 ゆくを末世とはいへるにや。昔許由といふ人は、帝堯の國  
 を傳へんとありしを聞きて、潁川に耳を洗ひき。巢父これ  
 を聞きて、この水をだにきたながりて渡らざりき。その人  
 の五臟六腑の變るにあらじ。よく思ひならはせる故にこ  
 そあらめ。

なほ行末の人の心おもひやるこそあさましけれ。大か  
 たおのれ一身は恩に誇るとも、萬人の怨を残すべきこと  
 をばかへりみざらん。君は萬姓の主にてましませば、かぎ  
 りある地をもちてかぎりなき人に頒ちたまはんことは

(一)朱雀天皇天  
 慶二年(一五  
 九九)反す。



北 親 房 卿

推してもはかり奉るべし。もし一國つつを望まば、六十六  
 人にて皆ふさがりなん。一郡つつといふとも、日本は五百  
 九十四郡こそあれ、五百九十四人は悦ぶとも、千萬の人は  
 よろこばじ。いはんや日  
 本の半ばを心ざし、みな  
 がら望まば、帝王はいづ  
 くを知らせたまふべき  
 にか、かゝる心の萌して  
 言葉にも出で、面にも恥  
 づる色のなきを、謀叛のはじめとはいふべきなり。昔の將  
 門の比叡山に登りて大内を遠見して、謀叛を思ひ企てけ



るも、かゝるたぐひにやありけん。昔は人の心正しくして、將門に見も懲り聞きも懲りけんを、今は人々の心かくのみなりにたれば、此の世はいよく衰へぬるにや。

(二)漢帝の第一代。姓は劉名は邦。  
(三)後鳥羽天皇。文治五年(一一八四九)。

漢の高祖(一)の天下をとりしは、蕭何、張良、韓信が力なり。これを三傑といふ。萬人にすぐれたるを傑といふとぞ。中にも張良は高祖の師として、籌を帷幄の中にめぐらして、勝つことを千里の外に決するはこの人なり。と宣ひしかど、張良は驕ることなくして、留といひてすこしなる所を望みて封ぜられにけり。あらゆる功臣おほく滅びしかど、張良は身を全くしたりき。近き世のことぞかし、頼朝の時までも、文治(三)のころにや、奥の泰衡(四)を追討せしに、みづから向ふ

ことありしに、平重忠が先陣にてその功すぐれたりければ、五十四郡のうちいづくをも望むべかりけるに、長岡郡とてきはめたる少き所を望みて賜はりけりとぞ。これは人に廣く賞をも行はしめんためにや。かしこかりけるをのこにこそ。

### 六 忠義の二字

(一)伊藤博文公。  
(二)相模大磯にある別邸。

明治四十二年十月、公(一)の滿洲に向つて出發せらるゝ十日乃至二週間前の事なり。一夕令息文吉氏東京より大磯(二)に來り、雙親及び記者と滄浪閣に晚餐を共にす。食後公爵夫人は別室に退かれ、文吉氏と記者とは尙食卓に留りて、



各般の問題に關する公の清談を謹聽せり。  
談進みて、文吉氏前途の事に及ぶや、公は莊重なる言語を以て、文吉氏を誡めて曰く、

爾の勉學中は予故らに之を口にせざりしといへども、既に大學を卒業し、一箇の男子として社會に立たんとす。審に今夕予が言はんと欲する所を傾聽し、且之を記憶せよ。往事を追懷すれば夢の如しといへども、五十年來予の行動を一貫せる主義方針は忠義の二字なり。予が幼時如何に日本政記を愛讀したるか<sup>(三)</sup>は、爾蓋し之を聞知せるならん。日本國は金甌無缺の皇室を中心として政治を施すにあらざれば、到底國

(三) 頼山陽著、日本の歴史。八冊。  
金甌無缺

貢獻

民の一致を保ち、國運の進張を圖ることを得ず。随つて、忠義の二字を心に體するものにあらざれば、眞に國家に貢獻するを得ず。予が子孫にして、若し忠義の二字を忘るゝ者あらば、子孫にして子孫にあらず。榮枯盛衰は世の常なり。予の子孫たる者、時勢の變遷によりて如何に零落すとも予は憾とせず。然れども忠義の二字を忘るゝに至りては、予の名節を汚し、五十年來の苦心を水泡に歸せしむるものなれば、斷じて之を許すを得ず。

名節

水泡に歸せしむ

と。これより、公は古今の實例を引照し、忠義の日本國民たるに最も必要な資格たるを諄々として説明せられ、遂



に深更に及べり。公寢室に退かれたる後、記者は文吉氏に謂つて曰く、嚴父公今夜の訓誡は、君須く之を筆にし、永く子孫に傳へ、世父公の志を繼がしめざるべからず。と。文吉氏答へて曰く、予も亦然せんと思へり。と。

然り而して、公當夜の言、今や重要な遺言の一となれり。嗚呼。  
(古谷久綱、藤公餘影)

### 七 霜の美

稻熟し蟹肥

楓錦柿緋既に去りて橙黄橘綠來り、稻正に熟し、蟹正に肥ゆ。この時、吾人ははじめて、霜の美を見る。ひとしくこれ

六出繽紛

玉樓銀臺

杳々靉靄

水蒸氣の凝結なり。而して、かの雪や、雨や、霰や、詩人に歌はれ、畫家に描かれ、何人にも天與の美、自然の妙として愛好せられ、賞玩せらる。殊に雪の如きは、月、花と並べて天下の三大美として傳唱せらる。雪や靈あらば當に人間の知遇に泣くべし。その六出繽紛たる時、空林枯木一朝にして花咲き、玉樓銀臺一夜にして成る。雪や眞に美なり。或は時雨となり、或は春雨となり、或は梅雨となり、或は驟雨となり、晴好以外、別に雨奇の絶景をいだす。一過すれば則ち山色を月光となして新更に新を加へしむ。雨や眞に美なり。霞は對岸の漁家を飾り、或は澗畔の樵家を鎖し、杳々靉靄、名もなき山の花霞、人影を見ずして人聲を聞くべき妙景畫



風懷の高士

もまた及ばず。霞や眞に美なり。然れども霜の美決してこの三者に遜らざるなり。而して霜や殆んど詩人、畫家にその名を忘れられ、風懷の高士もまた一顧の勞に吝ならむとす。その不遇なる、むしろ憐むに堪へたり。爐湯沸え、火初めて紅なる邊、吾人霜の美を尋ねて五美を得たり。

清肌に染む

(一)霜の美は月夜に在り。青女は霜裡にあり。姮娥は月中にあり。いづれも白を更深に鬪はせて、水天一色、萬里澄明、冷骨に徹し、清肌せいみに染む。造化の精妙なる、この間僅かに數聲の砧衣せきいと一鳴の過雁かきとを點出し來る。色と聲と相投じて玲瓏絕、透徹絕、これを一掬すれば、詩脾頓に一泓の清なるが如し。李商隱「百尺樓臺水接天」と歌ひしもこの景なり。

詩脾清し

晚唐の詩人

(二) 上杉謙信

不識庵、霜滿軍營、秋氣清、數行過雁、月三更」と歌ひしもこの景なり。

寒飈

(二)霜の美は曙天にあり。空はなほ殘月を浮へて、岸樹寒飈せうに叫ぶ時、板橋の繁霜未だ人跡を印せず、誠に煙水茫茫の間に孤立して、曙光を俟つこと多時、初めて洲外の沙禽を見、山寺の鐘聲を聞く。この時や、滿目凄清、乾坤半點の塵埃を止めず、竹外の茶梅、籬下の寒菊、なほ殘色せうしきに誇るあり。かの白玉蟾びやくげんがいはゆる「淡々著烟濃著月、深々籠水淺籠沙」といふもの何ぞひとり梅のみならんや。

殘色に誇る

(三) 宋の嘉定中の詩人

落月を屋梁に送る

(三)霜の美は白にあり。試に早起落月を屋梁に送りて四顧すれば、蘆荻も白く、茅舍も白く、瓦も白く、池塘も白く、田



聲も亦白し

鈍筆

畝も白く、馬嘶も白く、驛鈴も白く、渡口に舟を喚ぶ聲も亦白し。殊に霜月の夜の白きに至つては、其の絶美、遂に吾人の鈍筆にてこれを寫すこと能はず。

(四)霜の美は紅にあり。霜そのもの紅なるにあらず。然れども、霜は他を紅化する作用あり。世人立田姫あるを知りて、青女あるを知らず。而して何ぞ知らむ。滿山の淡紅、深緋は立田姫が織りたるものにあらずして、青女が染め成したるものなることを。夏來の新緑、鴻雁來り燕子歸る時に及びて、忽ち紅化し、到る處秋燃えむとす。もし空林に華さかせたる雪を美なりとせば、新緑を紅化せしめたる霜は、更に美なりといふべし。これ立田が吉野と並稱せらるる。

秋燃ゆ

威容嚴肅

所以にして、また、霜葉紅於二月花」と歌はるる、所以なり。

(五)霜の美は凜にあり。秋氣凄絶、霜天に滿つる時は、士氣凜然、又劍鋭を加ふ。吾人をして夙起惰眠を貪らしめざるも、威容嚴肅、自重自尊を想はしむるも、實に霜の賜なり。霜の凜々たるは、かの霞の杳と雨の濛と、雪の皓々とに比して、美なること幾等ぞ。嗚呼、霜の美なることかくの如し。而して、その世に歌はれ、人に知らるること霞、雨、雪の十が一にも及ばず。吾人實に霜の不幸を憐む。思ふに、霜人に知らるるを欲せざるか、また人霜を知るの明なきか。

(石橋忍月)



分限相應

### 八 身の分限

人は何事も、その身の分際相應にするがよきなり。分限に過ぎて奢るがわろき事は申すに及ばず。またあまり降して軽くするも、正道にはあらず。大名は大名相應に御身を持ち給ふがよし。質素がよしとて、下々の武士の如く御身を持ち給ふべきにもあらず。次にその下にたつ武士も、またその身の相應がよし。百姓、町人もまたその身上相應に身を持つが宜しきなり。すべて事を軽くするがよろしとて、またあまり身持軽々しければ、それに應じておのづから心も、萬づの行も、卑しく軽々しくなりて、上にたつ

潤乾く

人などは、殊によからぬ事多きものなり。また儉約を心がくれば、おのづから吝嗇の方に流れ易きものにて、必ずすべき事をも止めてせず、人に取らすべきものをも惜しみて取らせず、甚だしき者は、人の物をさへ奪はまほしく思ふやうの心にもなり易し。然るにこゝをよく心得て、儉素にてしかも吝嗇に流れぬやうにはありにくきものなり。殊に上にたつ人など、このわきまへなくして吝嗇なる時は、下の潤乾きて、甚だ宜しからず。されば儉約も實にはよろしき事にあらず。とかく、上、中、下、各身分相應にくらすがよきなり。

然りといへども、その相應といふはいか程が相應なる



か。手本のなきものなれば、よき程は知りかたき事なるに、總じて華美なる方には移り易く、少しも質素なる方へは移りにくきものなれば、治平の久しく續ける世は、一同に段々華美の長ずる習にして、上にも申せる如く、今の世ほど下が下まで華美なることは、古今の間になき事なれば、今の世に、これぞ分限相應のよき程ならんと思ふ事は、皆大いに分限に過ぎてあるなり。さればこれをよき程にせんと思ふときは、萬事を大いに殺ぎ捨てて、狂人かと人に笑はるゝ程に落さざれば、各の身分相應の所へは當り難し。然れども、左程までにはとても落し難きものにて、たとひ自分一人は人に構はず、右の如くに落しても、家内まで

には行届きがたく、また上よりいか程嚴しく命令を下しても、これを制せられても、時世の勢は中々防ぎがたく、人力の及び難きところあるものなり。たとひ暫くは命令に恐れてこれを慎むやうにても、末遂げがたく、またうはへは命令を守るやうにても、内々にては皆これを破る。衣服の制などみな然なり。また一國限りこれを制しても、天下一同ならざれば、その制立ち難き事も多し。また總體、表向へは出でざる家内の細かなる事の、奢の甚だしきを一一つ吟味を遂げて、これを禁すべき由なければ、兎に角にこの世上一同の華美は、いかやうにしても俄には停めがたく、年々月々に長じゆくばかりなり。されども物は限り



有りて、昇りきはまる時は、またおのづから降る事なれば、  
いつぞは又もとへかへる時節も有るべきにや。



安閑

安閑として待ち居るべきにもあらず。されば上にたつ人は、  
隨分なるべきだけは工夫をめぐらして、自他、奢の長ぜざるやうに、  
少しづつにても、質素の方へ歸るやうに計ら

されどこの世上の奢な  
本どの、自然と質素の方へ歸  
居るといふ事は、先づは何ぞ  
宣變なる事などのなくては  
長歸りがたき事なれば、その  
變の有りにて自然と歸るを、

ひ給ふべきなり。少しづつにても質素の方に歸りて長ず  
る事なれば、起るべき變事も起らずして、長久に無事なる  
べし。

さてその計らひはいかにといふに、右に申せる如く、此  
の事は、厳しき命令ばかりにては、逆も直り難き事にて、唯  
唯面々自然とたしなむ心になりて、おのづからにするや  
うに計らふべき事なり。下は兎角に、善き事も悪しき事も、  
上に倣ふものなれば、先づ上より物事落さるゝだけ落し  
て、軽くして見せたまはば、漸おのづから、御家中も、下々の  
民も、それに倣ひ、その心に成りて、竟には却りて華美なる  
事を笑ふやうにもなるべきことなり。すべて何事にてても、



歸服

心よく歸服してする事にあらざれば、末とほりがたく、永くは行はれぬものなり。さてその下々を心より歸服せしむることは、皆上よりの計らひ仕方によることぞかし。

(本居宣長、祕本玉くしげ)

鎌倉時代  
に作  
（厚昔物語）

九 宇治拾遺物語—五色の鹿の事

これもむかし、天竺に身の色は五色にて、角のいろは白き鹿一つありけり。深山にのみすみて、人に知られず。其の山のほとりに大なる川あり。其の山に又鳥あり。此のかせぎを友として過す。或時此の川に男一人流れて、既に死なんとす。我を人助けよと叫ぶに、此のかせぎ此の叫ぶ聲を

聞きて、かなしみに堪へずして、河を泳ぎよりて、此の男を助けてけり。男命の生きぬることを喜びて、手をすりて鹿に向ひていはく、「何事もちてか此の恩を報い奉るべき」といふ。かせぎの曰く、「何事もちてか恩をば報いん。唯此の山に我ありといふことをゆめく、人に語るべからず。我が身の色五色なり。人知りなば、皮をとらんとて、必ず殺されなん。此の事を恐るゝによりて、かゝる山に隠れて、あへて人に知られず。然るを汝が叫ぶ聲を悲しみて、身の行方を忘れて助けつるなり。」といふ。時に男、「これ誠にことわりなり。さらに漏すことあるまじ。」と返す。契りてさりぬ。もとの里に歸りて月日をふれども、更に人に語らず。か



かるほどに、國の後夢に見給ふやう、大いなるかせぎあり。身の色は五色にて角白し。夢さめて大王に申し給はく、かかる夢をなん見つる。此のかせぎ定めて世にあるらん。大王必ずたづねとりて、われに與へ給へ。」と申し給ふに、大王宣旨を下して、もし五色のかせぎ尋ねて奉らんものには、金銀珠玉等の寶並びに一國等を給ふべし。」とおほせふれらるゝに、此の助けられたる男、内裏にまゐりて申すやう、「尋ねらるゝ色のかせぎは、其の國の深山に候。在所を、知り狩人を給ひて取りてまゐらすべし。」と申すに、大王大いに喜び給ひて、自ら多くの狩人を具して、此の男をしるべに召具して行幸なりぬ。その深山に入り給ふ。此のかせぎ

やうあらん

あへて知らず、洞の中に臥せり。かの友とする鳥、これを見て、大いに驚きて、聲をあげてなき、耳をくひてひくに、鹿驚きぬ。鳥告げて曰く、「國の大王多くの狩人を具して、此の山を取巻きて、既に殺さんとし給ふ。今は逃ぐべき方なし。如何にすべき。」と言ひて、なくく去りぬ。かせぎ驚きて、大王の御輿のもとへ歩みよるに、狩人ども矢をはげて射んとす。大王宣ふやう、かせぎ恐るゝ事なくして來れり。定めてやうあるらん。射る事なかれ。其の時狩人ども矢をはづして見るに、御輿の前にひざまづきて申さく、我毛の色を恐るゝによりて、此の山に深く隠れすめり。然るに大王如何にして我が住所をば知り給へるぞや。」と申すに、大王のた



まふ、此の輿のそばにある、顔にあざのある男、告申したるによりて來れるなり。かせぎ見るに、かほにあざありて、御輿の傍に居たり。我が助けたりし男なり。かせぎ彼に向つていふやう、命を助けたりしとき、此の恩何にても報じ盡しがたき由言ひしかば、こゝに我ある由人にかたるべからざる由返す。ちぎりし處なり。然るに今其の恩を忘れて、殺させ奉らんとす。いかに汝、水に溺れて死なんとせしとき、我が命をかへりみず、泳ぎ寄りて助けしとき、汝限りなく喜びしことは覺えずや。と、深く恨みたる景色にて、涙を垂れてなく。其の時に大王同じく涙を流してのたまはく、汝は畜生なれども、慈悲をもて人を助く。かの男は慾

に耽りて恩を忘れたり。畜生といふべし。恩を知るをもて人倫とす。とて、この男を捕へて、鹿の見る前にて首斬らせらる。又宣はく、今より後、國の中にかせぎを狩ることなかれ。もし此の宣旨をそむきて、鹿の一頭にても殺すものあらば、速に死罪に行はるべし。とてかへり給ひぬ。其の後より天下安全に、國土ゆたかなりけりとぞ。

一〇 宇治拾遺物語—莊子畜類

を見て逃走りし話

今は昔、震旦に莊子といふ人ありけり。心賢くして悟廣し。この人道を行く間、澤の中に一つの鷺ありて、物をうか

(一)支那  
(二)支那周代の人。孟子と時代を同じくす。姓は莊、名は周。



がひて立てり。莊子これを見て、竊に鷺を打たんと思ひて、杖をとりて近くよるに、鷺逃げず。莊子之を怪しみて、彌近く寄りて見れば、鷺一つの蝦を食はんとして立てるなりけり。されば、人の打たんとするを知らざるなりと知りぬ。また其の鷺の食はんとする蝦を見れば、逃げずしてあり。これも亦一つの小蟲を食はんとして、鷺のうかぶを知らず。其の時に、莊子杖を棄てて逃げて、心のうちに思はく、鷺蝦皆我を害せんとするを知らずして、おのゝ他を害せんことをのみ思ふ。我亦鷺を打たんとするに、優る者ありて我を害せんとするを知らず。されば如かじ、我逃げなんと思ひて走り去りぬ。これ賢きことなり。人かくの如く

思ふべし。

又莊子、妻と共に水の上を見るに、水の上に大きな一つの魚浮び遊ぶ。妻之を見て曰く、「この魚定めて心に喜ぶことあるべし。極めて遊ぶ。」と。莊子之をきゝて曰く、「汝はいかで魚の心をば知れるぞ。」と。妻答へて曰く、「汝はいかで魚の心を知り、知らぬをば知れるぞ。」と。その時に莊子曰く、「魚にあらざれば、魚の心を知らず。我にあらざれば、我が心を知らず。」と。これ賢きことなり。實に親しといへども、人他の心を知ることなし。されば莊子は妻も心賢く、悟深かりけりとなん語り傳へたるをや。



大晦日

一一 川柳點

今年こそ、大晦日には早く仕事を仕舞ひ、ゆつくりと年  
 を取るべしと、何れの家も、大晦日には其の心掛をなせど  
 も、何がさて一年の終の日とて、折角に外向の用を濟せば、  
 家内の用向、元日の支度にたうとう夜に入りて、大騒のう  
 ちに舊年、新年の境目なる十二時の時計は鳴つて、舊年の  
 尻の事を爲しつゝ、はや既に新年に入るの類は、何れの家  
 も珍しからぬと見え、古き川柳にも、

据風呂

据風呂に下女が入るうち春になり

蓋し家内總仕舞の殿として、下女が風呂に入る頃は、はや

秋の草木のし  
 なるればむべ  
 山風を嵐とい  
 ふらん。古今  
 集。文屋康秀。  
 三人にはつけ  
 ふあまのつり  
 ふれも草もか  
 人目とおもへ  
 ばれぬとおも  
 へるにしらぬ  
 來るよしもか  
 人のいのちの  
 なしくもある  
 かなしれすこ  
 人おもひをめ  
 かしれすこ  
 秋は來にけ  
 り人も身をも  
 うらみさらま  
 しいふよしも  
 ないふよしも  
 かわく間もな  
 以上百人一首  
 の句の頭に人  
 の字ある歌

十二時を過ぐることと見えたり。昔も今も變らぬものは  
 是等の有様なり。

川柳ほど氣の利きたるものはなし。

むべ山の中に嵐の年始客

これも實際有りさうなことなり。又曰く、

歌がるた人と云ふ字に手が五つ

是等も昔の句ながら、今も同様、かるたの句の頭字の人と

云へるには、五つどころか、一時に十も手が出る如し。又曰

く、

一日の御慶炬燵へとりよせる

旦那様歸宅の後、夜分に入り、どれく、新年の名刺を持って



川柳

排句  
訓

來よ。と言ふは、何れの家も似たるものなるべし。又曰く、  
 上るなと言はぬばかりの帳を出し  
 これは、今の若き人には分らぬやも知れず。今なれば左の  
 如く言ふを可とす。  
 上るなと言はぬばかりの箱を出し  
 これは、名刺入れの箱と知るべし。又曰く、  
 嫁の出るまではまだるい歌がるた  
 佳興に入る頃は、若き嫁さん迄一座に飛入る。かるたの花  
 の盛りなるべし。又曰く、  
 櫪子れんじに同居駒下駄と福壽草  
 これも町家の狭き處には、往々見掛くる實景なり。

吉地

(四)源三位頼政の臣猪俣太

(三)支那の王、姓は姫、名は昌、太公望を得て國を盛にする

凡そ川柳は、突如として來り、初より其の題を言はぬところ  
 くに妙味あり。  
 芭蕉は飛込み道風は飛上り  
 若し此の句の前に題を蛙と書きたらんには、興味薄かるべし。  
 其の出し拔なる處面白し。  
 釣れますかなどと文王ぶんおうそばへ寄り  
 の如き有名の句も、其の突如として出る處に妙あるのみ。  
 釣りなぞもしてみる馬鹿な軍學者  
 常に文王が來るとは限らず。太公望氣取りの軍學者も困つたものなり。  
 其の暗さ隼太櫻(四)に突當り



尾籠

まさかに暗しとて、紫宸殿の大庭の櫻に突當る程にもあ  
るまじけれども、何かなしに可笑し。

右の諸句は、川柳として品のよき方なり。若し其の秀逸  
と稱せらるゝものを數ふれば、いづれも皆尾籠千萬にて、  
士君子の間に語り難きもののみ。其の愈、尾籠なるほど、其  
の特色益著し。

若し川柳をして尾籠千萬の境より脱せしめば、蓋し詩  
歌中の珍ならん。  
(矢野文雄の文による)

一二 人の過失

總べて人間は聖人でない限り、過失は有りがちのもの

緣故

同輩

目上

人を見て法  
を説く  
譴責

であるから、之を責めたり、忠告したりするのは、甚だむづ  
かしいことである。人間界は種々なる階級や、緣故で以て  
形づくられて居ると同時に、其の氣風も千差萬別である  
から、誰にも、彼にも、同一態度、同一言語を以て之を責めた  
り、忠告したりすることは出来ない。自分の周圍には同輩  
もあれば、目上の人もある。志を同じうする他人もあれば、  
志を異にする親戚もある。境遇を同じうする他人がある  
かと思へば、境遇を異にする親友もあるといふ風である  
から、人を見て法を説かねばならぬ。こゝが譴責忠告の困  
難なる所以で、父子の如き親しい間柄でも、悪事非行を責  
めるのは餘り好ましいものではない。孟子に、父子の善を



身寄

責むるは恩を傷ふの大なるものなり。といふことが見え  
て居るが、實に其の通りで、假令父子の間でも、却つて恩を  
仇に思はれることがまゝある位である。さればこの一事  
から推測しても、人を責むることの困難であることは知  
られるであらう。

併し自分の部下に使ふものは、假令身寄、親戚、友人であ  
らうとも、それ等の人々の行爲に誤つた點があると認め  
たならば、それは自分の責任として、飽くまで忠告して直  
してやる様にしなくてはならぬ。殊に目下の者の過失に  
對しては、心を用ひ、極力これが改心に力を注いでやる様  
にすべきである。然れども、其の過失の責方に就いては、何

慎重

諷刺的

憎惡の念

處迄も慎重の態度で、相手の地位を異にし、境遇を異にし、  
年配を異にし、志を異にする程度に應じ、それ〴〵其の手  
段を變へる必要がある。或は溫柔な態度を以て諷刺的に  
する場合もあるであらうし、或は正面から猛烈に攻撃す  
る場合もあらう。けれども過失を過失と覺つて改めさせ  
ることが、過失を責めることの主眼であるから、如何なる  
方法に出でようとも、結局此の目的に外れぬ様にするの  
が、過失に對する巧妙な譴責法である。

過失を責めるに方り、先づ第一に心すべきことは、其の  
人に對して、幾分なりとも憎惡の念を挾んで居てはなら  
ぬといふことである。若しさういふ心で人を責めては、折



禍根

反感

動機

あへこへ

角の心盡も何等の効果なきものとなるのみならず、時によれば、飛んでもなき禍根を残すことが出来せぬとも限らない。例へば如何に千萬言を費して忠告しても、それが反つて先方の人の心に反感を起させる様なことになる。とすれば、其の結果はどうであらう。自分は親切の心で忠告してやつても、先方は却つて自分を怨み、友人などならそれが動機で絶交もしかねぬこととなり、相手によつては、自分に危害を加へるやうになることが無いとも限らない。若し又反感を起させることがないとしても、その責方、忠告の仕方如何に依つては、相手の人があへこへに、その過失を過失と覺らずに終る様なことがなきにしもあ

根本條件

極力

赤心

諒とす

らずである。斯の如くにして、相手が過失と知りながら、それを改めることが出来なかつたならば、如何に言葉巧に忠告しても、それは何の役にも立たぬことになる。故に人を諫めたり、責めたりする場合に於ける根本條件としては、所謂「罪を悪んで人を悪まず」といふ態度を以てしなくてはならぬ。相手に對する憎惡の念を一切捨て、唯その過失に向つて極力改善を勧めるならば、多くの場合、それに對して反感を起させる様なことはなからう。よし又そんなことがあるとしても、至誠天に通ず。で、それに赤心を注いでその過失を責めれば、自分の意志は必ず相手の人も之を諒とし、遂に過失を改める様になるであ



獯猛 吐露

らう。若し如何にしても先方が之を改めぬといふならば、それは未だ自己の力の注ぎ方が足らぬのである。相手が極悪獯猛クワンマウの性格を有しない限り、自分が誠心を吐露してゆけば、必ず良心に訴へて反省するに相違ないと思ふ。人に忠告し、譴責を加へようとするものは、須くこの覺悟を以てせねばならぬ。

(澁澤榮一、青淵百話)

一三 長谷寺詣

(一)藤原秀郷の後裔。俗名は憲清。鳥羽上皇。北面の天皇。建久元年(一一八五)七月十三日卒。

弓張月の漸う光りて、入合の鐘の音も收る頃、西行は長谷寺に着きけるが、問驚かすべき法の友の無きにはあらねど、問ひも寄らで、観音堂に参り上りぬ。さなきだに梢透

(二)大和國磯城郡初瀬町にある。今言宗。山派の本山。

(三)法華經普門品第二十五卷には觀音經なり。

隨喜

きたる樹々をなぶりて、夜の嵐の誘へば、はらくと散る紅葉なんどの空に狂ひて吹入れられつ、法衣の袖にかゝるも哀れに、また佛前の御明燈の瞬しつゝ、萬般のものも黒み渡れるが中に、いと幽かなる光を放つも趣あり。法華經の品第二十五を聲低う誦するに、何と無く平時よりは心も締りて、身に浸みわたる思のすれば、猶誠を籠めて誦し行くに、天も静けく地も静けく、人も全く静まりたる、時といひ、處といひ、相應じて、我が耳に入るは我が聲ながら、若しくは隨喜佛法の鬼神なんどの聲を和せて、共に誦するかと疑はるゝまで、上無く殊勝に聞え渡りぬ。特に参りたる甲斐は有りけり。菩薩も定めし斯る折の斯る所作を



趺坐

ば善しとして、必ず納受し給ふなるべし。今宵の心の澄切  
りたる、此の清しさを何に比べん。あまりに有難くも尊く  
覺ゆれば、今宵は夜すがら、此の御堂の片隅になり趺坐な  
して、曉方になほ一度誦經しまゐらせて、さて其の後香華  
をも淨水をも、供して罷らめ。と、西行やがて三拜して、御佛  
の御前を少し退り、影暗き一隅に身をねぢ据ゑ、凍れる水  
か、枯れし木の、動きもせねば、音も立てず、寂然として坐し  
居たり。

沈々

夜は沈々と漸く更けて、風も睡れる如くになりぬ。右左  
に並びて立ちたりける御燈明は、一つ消え、また一つ消え  
ぬ。今はたゞいと高き吊燈籠の光朦朧として力なきが、夢

所化

の如くに残れるのみ。此の寺の僧どもは寒氣に怯ちて、所  
化寮に爐をや圍みてあるらん、影だに終に見するもの無  
し。いふ可き方も無く靜かなれば、日比焼きたる餘氣なる  
べし、今薰ゆるとにはあらぬ香の、有るか無きかに、自ら匂  
を流すも、いと能く知らる。かゝる折から、何者にか此方を  
指して來る足音す。御佛に仕ふる此の寺の者の燈燭を續  
ぎまゐらせんとて來つるにやと打見るに、御堂の外は月  
の光白々として、霜の置けるが如くに見ゆるが中を、寒さ  
に堪へてや、頭には何やらん打被きたれど、正しく僧形し  
たるが歩み寄るさまなり。心を留むるとにはあらざれど、  
何としも無くなほ見てあるに、やがて月の及ばぬ闇の方

僧形



高さは高し  
互の程は隔

へ身を入れたれば、定かには知れぬながら、此の御堂に打  
向ひて、一度は先づ拜み奉り、さて静々と上り來りぬ。御堂  
は狭からぬに、燈は螢程なり。燈の高さは高し。互の程は隔  
りたり。此方を彼方は有りとも知らず。彼方を此方は能く  
も見得ねば、西行はたゞ我と同じき心の人も亦有りける  
よと思ふのみにて打過ぎたり。彼方は固より闇の中に人  
有ることを知らざれば、何に心を置くべくも無く、御佛の  
前に進み出でつ、いと謹ましげに危坐りて、數多度合掌禮  
拜し、一心の誠を致すと見ゆ。同じ菩提の道の友なり。其の  
心操の淺間ならぬも、夜深の參詣に測り得たり。衣の色さ  
へ辨ち得ざれば、面はまして見るべくは無けれど、淨土の

合掌  
菩提  
淺間ならぬ

卒爾  
ニハカニ

同行の人なるものを呼びかけて語らばや。名も問はばや  
と、西行は胸に思ひけるが、卒爾に物言はんは悪しかるべ  
し。祈願の終つて後にこそと、心を控へて伺ふに、彼方は數  
珠を取出し、さやくとばかり擦り始めたり。針の落つる  
音も聞くべきまで物靜かなる夜の御堂の眞中に在りて、  
水精の數珠を擦る音の亮かなる響いと冴えて神々し。御  
經は心に誦すると覺しく、萬籟絶えたるに、珠の音のみを  
たゞ緩やかに響かす。其の聲、或は明らかに、或は幽かに、或  
は高く、或は低く、寢覺の枕の半ばは夢に霰の音を聞くが  
如く、朝霧晴れぬ池の面に、菡萏の急に開くを聞くが如く、  
小川の水の獨り咽ぶか、雨の紫竹の友擦れか、山吹匂ふ山

萬籟  
スベテ、セ、ミ、カ、カ



ナリヨリウキニ  
コホクイセズ

萬法

菩提の善友  
浄土の同行

川の蛙鳴くかと過たれて、一聲聲中に萬法あり。皆與實相不相違背と、いとをかしくも聞きなされるれば、西行感に入つてありけるが、期したるほどの事は仕果てしや、其の人数珠を收めて、御佛をば禮拜すること數度しつ、やをら身を起して退らんとす。菩提の善友、浄土の同行、契を此の上に結ばんには、今こそ言葉を懸く可けれと、

思ひ入りて擦る數珠の音の聲澄みて

おほえずたまる我が涙かな

と、歌の調は好かれ、悪かれ、西行にはかに讀みかくれれば、彼方は始めて人あるを知り、思ひかけぬに驚きしが、何と仰せられしぞ。今一度と、心を押鎮めて聞ひかへす。聞取りか

しどろもどろ

ねけんと猜するまゝ、思ひ入りて擦る數珠の音の聲澄みて。と復び言へば後は言はせず、君にておはせしよ。こはいかに。と涙にふるふおろく、聲、言葉の文もしどろもどろに身を投伏して取附きたるは、聲音に紛ふかたも無き、其の昔の我が妻にぞありける。

(幸田露伴、二日物語)

鴨  
長明

うたかた

一四 方丈記—方丈の室

行く川の流は絶えずして、しかも本の水にあらず。よどみにうかぶうたかたは、かつきえ、かつむすびて、ひさしくとままることなし。

世の中にある人とすみかと亦かくのごとし。玉しきの



いらかをあらそふ

都のうち、むねをならべ、いらかをあらそへる、たかき、いやしき人のすまひは、代々をへてつきせぬものなれど、之をまことかたづぬれば、昔有りし家はまれなり。あるは大家ほろびて小家となる。すむ人もこれにおなじ。ところもかはらず、人もおほかれど、古見し人は、二三十人が中に、わづかに一人二人なり。朝に死に夕に生るゝならひ、たゞ水の泡にぞ似たりける。知らず、生れ死ぬる人、何方より來りて、いつかたへか去る。又知らず、かりのやどり、誰が爲に心を惱し、何によりてか目をよろこばしむる。其のあるじとすみかと、無常をあらそひ去る様、いはば朝顔の露にことならず。あるは露おちて、花のこれり。残るといへども朝

無常をあらそひ去る

十一

(一)住みわびて  
我さへの草の  
しふかたがたし  
げき宿かな  
(金葉集、周防  
内侍)  
(二)高倉天皇の  
晩年安元治  
承の頃

たつき

(三)加茂の川  
原

日にかれぬ。或は花はしほみて、露なほきえず。消えずといへども夕を待つことなし。  
わが身父方の祖母の家を傳へて、久しく彼の所にすむ。その後、縁かけ身おとろへて、忍ぶかたぐしげかりしかば、遂に跡とむることを得ずして、三十餘にして、更に我が心と、一つの庵を結ぶ。これをありし住居になずらふるに、十分が一なり。たゞ居屋ばかりをかまへて、はかしく、は屋を作るに及ばず。わづかについぢをつけりといへども、門たつるにたつきなし。竹を柱として車やどりとせり。雪ふり風ふくごとに、危からずしもあらず。所は川原近ければ、水の難ふかく、白波の恐もさわがし。すべてあらぬ世



(四)長明が五十  
歳の春。後鳥  
羽天皇建久の  
頃。

(五)山城國、愛  
宕、乙訓兩郡  
に跨る山。京  
都の西北。

(六)土御門天皇  
建永の頃。

を念じ過ぐしつゝ、心をなやませることは、三十餘年なり。その間、折々のたがひめに、おのづからみじかき運をさとりぬ。すなはち五十の春を迎へて、家を出て世をそむけり。もとより妻子なければ、捨てがたきよすがもなし。身に官祿あらず、何につけてか執をとゞめん。空しく大原山の雲に、いくそばくの春秋をかへぬる。

こゝに六十の露きえがたにおよびて、更に末葉のやどりをむすべることあり。いはば旅人の一夜の宿を作り、老いたるかひこのまゆをいとなむが如し。是を中頃のすみかにならずらふれば、又百分の一にだも及ばず。とかくいふ程に、齡は年々に傾き、すみかは折々にせばし。その家の有

(七)山城國宇治  
郡木幡山の東  
北なる日野山  
の麓。

様よのつねならず。廣さはわづかに方丈、高さは七尺ばかりなり。所を思ひ定めざるが故に、地をしめて作らず。土居をくみ、打覆をふきて、つぎめごとにかけがねをかけたなり。もし心に叶はぬ事あらば、易く外に移さんが爲なり。其の改め作る時、いくばくの煩がある。積む所わづかに二輛なり。車の力をむくゆる外には、更に用途いらす。

また麓にひとつの柴の庵あり。すなはちこの山守が居る所なり。かしこに小童あり、時々來りてあひ訪ふ。もしつれづれなる時は、これを友としてあそびありく。かれは十六歳、われは六十。その齡ことの外なれど、心をなくさむる事はこれおなじ。或はつばなをぬき、岩なしをとる。又ぬか



(八)宇治郡高嶺の北にあり。俗に木幡の關の迹なり。  
(九)紀伊郡鳥羽も同郡。師は乙訓郡。宇治の東北に戸山の東にあり。宇治の醜たる。東にあり。  
(三)近江國滋賀郡。石山も粟津も同郡。  
(三)宇多天皇第八の皇子敦實親王の雜色。親人にして、和歌。程程の名。人。  
(四)近江國粟津郡。上り。宇治の郡。川。人。一首。代不の歌。

こをとり、芹を摘む。或はすそわの田におりて、落穂を拾ひてほぐみを作る。もし日うらゝかなれば、嶺によちのぼりて、はるかに故郷の空を望み、木幡山、伏見の里、鳥羽、羽束師を見る。勝地は主なければ、心を慰むるにさはりなし。あゆみわづらひなく、志遠くいたる時は、これより嶺つゞき炭山を越え、笠取を過ぎて、或は岩間にまうで、或は石山を拜む。もしはまた粟津の原を分けて、蟬丸翁が跡をとぶらひ、田上川をわたりて、猿丸太夫が墓をたづね、歸るさには折につけつゝ、櫻を狩り、紅葉をもとめ、蕨を折り、木の實を拾ひて、かつは佛にたてまつり、かつは家づとにす。もし夜しづかなれば、窓の月に古人をしのび、猿の聲にそてをう

(六)山城國久世治川の西にあり。  
(七)山鳥のほろほるとなく聲きけむかかとぞおもふ。玉葉集。行基菩薩。いふ事もなき埋火をおこなふ。冬にねすか。な。友の信。百首。藤原國

るほす。叢の螢は遠く眞木の島のかゝり火にまがひ、曉の雨はおのづから木の葉吹く嵐に似たり。山鳥のほろ／＼となくを聞きて、父か母かとうたがひ、峰のかせぎの近くなれたるにつけても、世に遠ざかる程を知る。或は埋火をかきおこして、老のねざめの友とす。おそろしき山ならねど、ふくろふの聲をあはれぶにつけても、山中の景氣折につけてつくることなし。  
(鴨長明)

一五 宮城御移轉の記

明治二十二年一月十一日といふに、わが大君は大御世(一)の千代田の宮に御わたましせさせたまへり。年ごろ赤坂(二)

(一)明治天皇  
(二)只今の皇居  
 わたまし



(三)元は紀州侯の屋敷。明治六年より二十二年まで此處にましませよろづ事をぎて

ひたぶるに

(四)仁徳天皇

と、のほり  
と、宮

なる假宮に、よろづ事をぎておはしましたつるを、高き賤しき心ある限り、かしくみ奉りて、あるはたからを捧げ、あるは宮木を運びて、とく宮造りはてんことをねぎまつりしかど、上にはさしも急がせたまはず、只々國を富まし、民を豊かならしめんことをのみ、ひたぶるにおもほしめしたるは、難波の宮の昔にも立勝りて、いと有難きわざになん。しかはあれど、海の外の國々と交りて、御國の光を輝かすべき時にしあれば、百の司人たち心を合はせておきて行ひ、よろづの工匠ども、日に月に怠なく勉め勵みし程に、二十一年十月に至りて、内外のかざりまでも、悉くと、のほりて、天つ日嗣のとこ宮と定めたまはんに、足らはぬこ

となくなりにかば、そがいたづきを空しうせじとて、速かに移ろはせたまはんことをおもほし立たせたまへるなるべし。

二日ばかり先だちて、まづ賢所をわたし奉らせたまふ。年は立ちぬれど、まだ冬のするにしあれば、大かた雪霰がちなる頃ながら、この日は空もうらゝかに霞みわたれるこゝちして、神の御心もゆかせたまふらんと、いと頼もし上、きさいの宮にも、大庭におり立たせたまひて、見たまつり送らせたまへり。御あとさきに騎兵あまた従ひ、式部職の人々おごそかに護り奉りて、御車二つ、御唐櫃三つばかり引續き渡らせたまふ御様、いとかうくしう尊し。

(五)昭憲皇太后  
式部職



大みけしき

遷幸の日は殊にのどかにて、そらには塵ばかりの雲だに見えず、朝日はなやかにさし出でたるに、大みけしき一入こまうるはしう、御二所御車にめさせたまへば、親王おとたち、大臣ちんたちをはじめ、宮内官數をつくして、御供つかうまつれり。樂隊の聲勇ましう、御門引出づるより新宮に入らせたまふまで、御道すがら、老いたる、若き男女、山の如くに重なりて拜みたてまつる。中にも學校の生徒等は、ひとしほ清らに装ひつゝ、御車の過ぎさせたまふほど、君が代の唱歌をうたひていはひ奉れるさま、いとめでたし。十時過ぐるころ、おはしましたつきて、やがて奉迎、供奉の人々に謁ごを賜はせらる。各祝の大御酒賜はり、萬歳を呼びかはす聲ども

いと賑し。

渡殿

(六)宮中御局の名。藤壺のこと。

かくて少しのどかになりぬる夕つ方、上、后とともにこかしこ御覽じわたしつゝ、おのれが渡殿のほとりについ居たるを、老人は寒からぬ處こそよかめれ。とのたまはせて、飛香ひか舎のおまし近う座を賜はり、すびつをさへ免させたまへる御惠の程、畏しなどいふもおろかなり。年月御あたり近う仕うまつりて、御いつくしみをかうぶりなれたる身にも、こたびの仰言は、更に忝かたじけなさのおき處なきこと、ちするにつけて、この新宮どころ長へに榮え、この君が代天地と共に久しうおはしまして、よろづの民を撫でいつくしませたまはんこと、このおい人をあはれませたまふ

忝さのおき處なし



如くならんことを祈りたてまつるになん。

うつります千代田のみやの宮柱

ゆるがぬ國のもとりなりけり

(稅所敦子、御垣の下草)

一六 小野の深雪

文徳天皇の皇子に惟喬親王といふがおはす、第一の皇子にましまし、かば、御位は此の親王に譲らせ給はんの叡慮なりしが、紀名虎の女の生みまつれるなりければ、藤原氏をは、からせ給ひて、果し給はず、良房の女のうみまつれる惟仁親王、御位につかせ給ふ。御年僅かに一歳。古に

(一)第五十五代  
の天皇。嘉祥  
三年(一〇五  
〇年)より天  
元(一〇五五  
年)まで在位  
八年。  
(二)御母は紀  
長子。和歌  
四年(一〇五  
三年)に  
小野の里(今  
京都の上京  
大炊御門の  
南、烏丸の  
附近)に居た  
まふ。醍醐  
天皇(一〇五  
五年)の御孫  
す。五十七  
歳(一〇五  
四年)に薨  
事。和天  
皇の御清

呼ぶ  
やらんかた  
なし

(四)平城天皇の  
皇子阿保親王  
の第二子

やらんかた  
なし  
あぢきなき  
こと

(五)清和天皇の  
年號

もその例あらぬ御事にや。當時藤原氏のほしいまゝなる、  
思ひやるべきにこそ。在原業平は惟喬親王にしたしう仕  
へまつれるものなり。いかにもしてこの親王を立て奉ら  
ばやと、心をくだきしかひもなく、世の中かゝるさまにな  
りにければ、そのいきどほりまたやらんかたなし。惟喬親  
王、世をあぢきなきことにおぼして、ある夜ひそかに髪を  
おろさせたまふと、きゝまつれる業平のおどろきはいか  
にぞや。親王はやがて小野といふところに庵室を結びて、  
そこにこもらせ給ふ。こは貞觀十四年七月十一日のこと  
とぞきこえし。  
あくる年の正月元日、業平新年のよろこびきこえまつ



〔六〕山城國愛宕郡下賀茂神社のある處。  
〔七〕京都市の北方にあり。

炭竈のけぶり

らんとて、ひそかにいでたつ。きのふ、けふふりくらしたる雪に、鴨河<sup>(六)</sup>の森など、けしきおもしろからぬにはあらねど、歌よまんこゝちもせず。八瀬<sup>(七)</sup>、大原わたりに行きかよふ細き山路、みな雪にうづもれぬ。いそぎにいそげど、足ころにまかせず。松の木かげに立ちよりて、なほ行く方をながむるに、比叡の山、雪ことに白し。その麓のわたり、炭竈<sup>(七)</sup>のけぶり、細う立ちのぼれり。それやがて親王のおはする小野といふところならん。この雪にさぞやうづもれてましまさん。いかばかり寒けておはすらん。早く行きてなくさめまつらん。とおのれの寒さを忘れて、君をしのびまつるそのころは、ふり積る雪よりもげに深し、行きくつて、

ひるのほど小野につきぬ。賤の女にあひて、親王の御かくれ家はいつこ。といふに、かの雪にかくれたる松原のその奥なり。とこたふ。いふがまにく、わけ入りしに、こゝよりは賤山がつの行きかよひし跡もなし。風ふくごとに、松の梢より雪の亂れちりくる、いみじうさむし。或は下り、或は上り、路なきところをたどりつゝ、からうじて親王のおはする庵室にいたりつきぬ。

とひまつる人しなれば、雪にとざされたるまゝ、門もひらかず。奥のかたに讀經の聲のかすかにきこゆるは、あるじの親王の行ひたまふなるべし。ほとくと門をたたくに、老いたる下部出できぬ。誰にかおはする。とて、門ひき



かいやる

あけぬ。業平尋ねまゐれり。そのむねきこえまをせ。といふ。しばしありて、讀經の聲たえぬとおもひしに、親王ははや縁に出でさせたまふ。それと見たてまつるや、笠かいやり、とくはしりよりて、その御姿は。といひたるまゝ、ことばも出でず。あはれ世が世ならんには、貴き御位にもほらせたまふべかりけんを、かゝる深山の奥にこもらせたまふはいかにぞや。おもへば今日は元日なり。常ならましければ、百官有司皆拜賀の禮を申すべからんを、門の内外皆雪にうづもれ、この業平の外に、あとつけたるものなきはまたいかにぞや。

わすれては夢かとぞおもふおもひきや

あつく

はかなき現

雪ふみわけて君を見んとは

こはこれこの折によめる業平の歌なり。

まこと夢と思ひしならん。しかもまことの夢ならばさむる折のあらましもものを、げに夢よりもはかなき現なりや。親王しばしのほどは御ことばもなかりしが、やゝありて、よくこそたづねまゐりたれ、この雪に。と仰せたまふ。簀ぬぎすて縁にのぼりしに、そのかしらの雪はいかに。とて、墨染の御袖もてうち拂はせたまふ。業平あまりのうれしさに、縁にひれふしぬ。こなたへ。とのたまふまゝに、奥なる一間にとほる。御床には佛像をかゝげさせたまひ、御經机にはよみさし給へる御經など見ゆめり。親王は御脇息

經机

脇息



によらせたまひ、なほ近う。」とまねかせたまふ。御手の珠數  
いとうるはしく、御香のかをりいみじうたふとし。

ともかくも  
して

業平、かゝる雪ふみわけて、かゝるところにたづねま  
らせて、かゝる御ありさまを見奉ること、いかなる憂世に  
はへらん。」となげき申す。親王、さることは、いはんも何のか  
ひかあらん。けふは元日なり。こゝろよく物語してん。」と  
たまふ。さりとても御いたはしのことや。こもみな藤原氏  
のしわざ。業平この世にあらんかぎりは、ともかくもして  
御恨はらしまゐらせん。」といひて、ふりそゞぐあつき涙は、  
この寒きにこほらざりしなるべし。とかくするほどに、は  
や夕ぐれちかうなりぬ。この雪のはれ間に、御暇つかまつ

はし近う

らん。」といふに、今しばし。」とてとゞめたまふ。今日は病のむ  
ね朝廷にきこえあげ、しのびくゝにたづねまゐらせしな  
れば、これにて御暇賜はらん。」と申すに、親王もさのみはと  
どめさせたまはず。業平、新年の公事などはてたらんには、  
またこそたづねまゐらせめ。朝夕寒さをいとはせたまへ。」  
ときこえあげしに、汝も路のほど心してよ。」とのたまふ。  
業平泣くく、御門を出でぬ。親王はし近う出で給ひて、  
見おくらせたまふ。遣水めぐる路のくまに、立ちとまりて  
かへりみする折しも、比叡山おろしさと吹ききて、またも  
ふりしきるに、かなたは見えすなりぬ。こなたも見えずな  
りたらん。あなこゝろなのこの雪や。  
(落合直文)



玉のすだれ  
かまの軒の玉

蜘蛛のい

枯生

一七 をりふしの雨  
すべて春は雨こそそのどかなれ。軒端より霞みわたりにて、いとこまやかにふれるが、衣うるほせどもふるとは見えず。軒の玉水も間遠に音して、住みすてし蜘蛛のいに玉ぬくけしき、庭のおもの枯生の底にみどりや、添ひゆくも、柳の絲の動きもやらで露そふも、ともにいとものどかなり。ともし火かゝげても何となく光しめりたるに、鐘のおとのほのかに響きくるも、心すみわたりぬるものぞかし。其の外梅が香のしめりたるが夜深く匂ひわたるも、花にうしとかこちぬるもあはれはありけり。春もおい行く頃、蛙

時得がほ

あせり  
玉のすだれ  
雨の音

間遠に

玉のすだれ

の時得がほになき騒ぐもをかし。ほととぎすの初音いかにも思ふころ、村雨のはらくと降出でたるも、五月雨のいく日もふりくらしして、ふみの巻々くりかへさるゝなん、何となく世の中の事にも遠ざかりぬる心ちすなる。また暑さに堪へかぬる頃、雲のみなぎり出づる勢ありて、風ひとしきり吹きおちくるに、やなぎ蓮などの葉うらしろく見えたるもすゞし。やがておほきやかなる雨の間遠におちたるが、後にはしきりにふりきて、ものおとも聞えず、土のほひきたるもいとこちよし。軒端は玉のすだれ掛けたらんやうに、玉水の絶えまなくおちたるに、庭はひとつみづうみとなりて、あるは瀧おとし、または水は

一七 をりふしの雨

八七



庭濼

しらせたるに、人々しばし物いはで、うちまもりゐたるも  
 をかし。  
 や、雲うすくなれば、池の面にはかぞふるばかり雨み  
 えて、小鳥など庭へをどり出でて、餌ひろふさまなり。はじ  
 め雲のたち出でしかたは、はや空の一入みどりに見えて、  
 虹など見ゆるに、木々のみどりの庭濼に影見ゆるも、いと  
 すゝし。老いたる女など、かみの音に驚きてはひ出でたる  
 が、けふのは若かりし時のごとよく晴れにけり。今どきの  
 はかくはるゝもまれなりなど、はやくり言いふもあり。か  
 れはかくあわてしなどいひて、かたみに笑みどよみつゝ、  
 けふは蚊もすくなかるべし、神の音もいとかすかなり。此

ふつゝか

萩の上風

外山の鹿の音

覚

の頃の暑さも忘れぬとて、はし近う出づれば、夕月の光さ  
 しわたりて、草木の露も玉なすに、肥えふくれたる蛙のも  
 のまちがほに空うちならみて、ふつゝかなる音になくも  
 をかし。

秋來る頃の雨は、きのふにかはりて何となうさびし。  
 の上風、外山の鹿の音など、月よりも身にしむ心地ぞする。  
 常に聞きなれし、水の音までもあはれふかくこそ。月  
 の前のむら雨もまたをかし。まいてや、夜寒の頃、鳴きか  
 らしたる蟲のねの、雨のをやみにかすかなる聲して、枕近  
 く鳴きよるもあはれなり。

この雨に木々も染めなんと思へば、葦なども生ひ出で



つきくし

なん。栗も早や落つべしなどと、わらはへの物淋しげに燈  
火に向ひつゝ、いひ出づるも實に様々なり。夜深き鐘の音  
のうちしめる物から、さすがに秋は聲さえて聞ゆるにぞ、  
あはれはいとふかかり。紅葉のそめまさるも、白菊の移  
りゆきてひとさかり見するも、尾花の露重げにうちしほ  
れたるに、龍膽のうらみ深く咲きたるあたりもつきくし  
し。朝顔の皆かれたる中に、さゝやかにあかう咲出でたる  
が、晝過ぐるまでもしほみ遅れたる、またあはれなり。

秋のならひ

野分の風はおどろくしきものから、雨は夕立に劣ら  
ざれど、さすがにあはれをそふるは、秋のならひなるべし。  
時雨のさと音して、夕日に白く降りくるも、また音かへて

枕とふ

枕とふもをか。月よりも、闇の夜よりもあはれ深き物に  
は侍らずやと人の言へば、かやうに言ひならべては、げに  
もといふべからんが、一とせも降る心地して數へ見れば、  
この雨はをとつ圖より降り出でしをと思ふ(心はかはら  
じと心の中に思ひつゝ、聞き居るもまたをかしかりけり。  
春の雨は降るはあかぢの  
散るては世間いふ人も  
しらぬは

(松平定信)

一八 野村望東尼

望東尼は筑前福岡の人。文化三年浦野勝幸の三女とし  
て生る。容うるはしく、歌をよくし、書に巧に、裁縫刺繡のわ  
ざにもたけたりしが、同藩の士野村貞貫の、詩歌に嗜深く、

(一)光格天皇の  
年紀。元二四六六



時勢日に非

(一)名は忍向。京都清水寺に住僧。和歌を善くす。西郷隆盛と俱に海郷に投じて死す。年四十二。  
(二)福岡藩士。勤王を唱へた。勤王の幕へた。捕へられ、吏に明捕らる。七月天皇治元刑せら

正義廉直の士なるを聞きて、先妻の子三人あるをも厭はず、野村氏に嫁ぎて、よく其の家を治め、先妻の子をおほし立て、一家和合、春風の吹くが如くならしめぬ。のち家を長男に譲りて、平尾村のほとり、静かなる境に世を避けしに、安政の四年といふに、夫世を去りしかば、剃髮して佛の道に入り、其の名もと女を望東尼と改めぬ。當時幕府の專横甚だしく、時勢の日に非なるを見るにつけても堪へがたく、密に交を志士に結び、あるは其の山莊を會合の所とし、あるは同志をかくまひなどして、眞心を盡しぬ。されば、彼の僧月照が薩摩へ下りし時は此處にやどし、又平野國臣、高杉晋作等をも潜ましめ、其の危きを救ひて、ねもごろに

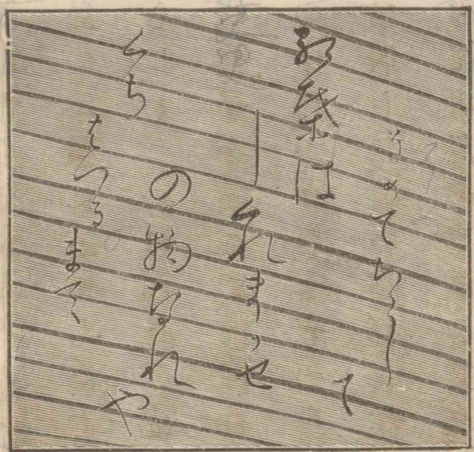
る。年四十三。或は三十九。  
(四)山口藩士。吉田文久の弟。子。海上航行して。勢を視察し。歸朝を願ふ。三年。天皇慶應三年。病死す。年二十九。  
(五)三條實美公。

いたはり、また太宰府に幽閉せられし三條公に謁しなどしたり。かゝる事つもりしかば、終に罪を得、捕はれて浪風あらしき玄海灘の一孤島、陸地を距る五里の沖なる姫島の牢獄に込められぬ。そこにあること二年、身を容るべきは、わづかに四疊の荒板敷、めぐりには松の檻木を組み、荒格子を構へて、海見ゆる南の方にのみ小さき窓ある牢の中に、かよわき老の身の押しこめられて、暑さ寒さを忍び居しに、彼の高杉晋作は、その舊誼に報ゆべく、同志を遣りて、姫島の牢檻を破り、望東尼を奪ひて長門に渡り隠れしかど、老軀長く堪ふるを得ず、維新の大業成るを見ずして、慶應三年十一月六日、年六十二歳にて、病の爲に空しく



一生の閱歴  
さながら一  
篇の詩

經緯



なりぬ。女ながらも皇國のおん爲、大君のおん爲に心を碎  
き、あるは志士の病をとぶらひて慰め勵し、あるは同志の  
間に入りて互の志を通ぜしめ  
しなど、其の心づかひなみく  
ならず。まことに其の一家の良  
妻賢母なりしが如く、隱に維新  
大業の良妻にして、また賢母の  
一人なりき。その一生の閱歴か  
くの如く、さながら一篇の詩な  
り。しかも忠誠もゆるが如き眞心を緯とし、感じ易き優し  
き女心を經として、すぐれたる才をもて、此の間に織りな

歌文の錦

句々皆血涙  
の跡をとむ

なよ竹のた  
わみながら  
に強きとこ  
ろあり

(六)筑前福岡の  
人。歌人。詞の  
久年中難波に  
出でて歌を教  
ふ。  
堂奥に達す

しつる歌文の錦、いかで世の常なるべき。

彼が歌は、或は悲憤慷慨、憂國の至情あふれて、句々皆血  
涙の跡をとむるあり。或は優麗閑雅、やさしき鶯の初聲を  
きくが如きあり。しかも此の兩面を相むかへ見て、初めて  
其のすぐれたる人となりをも知り、其の歌のまことの趣  
をも解しつべく、たけく雄々しきが中にも、なよ竹のたわ  
みながらに強きところあるを知り得べし。かつや其の歌  
の調の清新なる、その觀察の奇警なる、又よみさまの巧に  
して手のきつたる、其の、修辭に、用語に、自由輕妙にして、そ  
の師大隈言道さながらなるあり。もとより生具の天才な  
らんも、亦よく師を學びて堂奥に達せしものにあらざら



んや。以て其の修養の淺からざりしを知りぬべし。而してその歌の慷慨悲憤の一面は、これ彼が境遇性情より得來りしところにして、言道が和歌には見えざるところなり。

(佐佐木信綱、歌學論叢)

望東尼の歌

しばしだに物はおもはじその間にも

柳はもえて梅はちりけり

道遠く行きて歸りて今朝のこと

おもへば冬も日長かりけり

世のうさを取入れぬべき袋もが

口ゆひはてて野にすてましを

(七) 高杉晋作の  
こと

⑦ 谷梅(七)といふ人世を憚りてありけるに、

冬ふかき雪のうちなる梅の花

うもれながらも香やはかくるゝ

⑧ 月照といふ人の薩摩に下るに、

旅衣夜寒をいとへ國のため

草の枕のつゆをはらひて

一九 高嶺秀夫君を祭る文

明治四十四年二月二十二日、故東京女子高等師範學校長從三位勳二等高嶺秀夫君の靈を祭る。

君は資性溫厚にして、其の生徒を導くや、常に實行を責



浮華を戒む  
眞摯懇到

草創  
盡瘁

振作  
貢獻  
認識

めて、浮華を戒め、其の己を持し、事を處するや、方正和平、眞摯懇到、終始一貫してかはることなかりしは、實に人の師表たるものの模範となすべし。而して君は本邦師範教育の草創と、其の發達とに盡瘁せられしこと、前後三十年。其の前半は専ら心を高等師範學校に盡し、後半は主として力を本校に竭されたり。今日各地に師範教育の隆盛を來し、而して君の薰陶によりて、身を立て、家を成し、我が國家教育に従事せる數千の男女教員が、みな一意専心其の職務に勵精せるもの、これひとへに君が斯道の振作に力められたる賜といふべきなり。嗚呼君が國家に貢獻せられたる功績の偉大なるは、天下の齊しく認識せる所にして、

乏しきを承

驚鈍を竭す

冥鑑

薰香時差の  
奠  
來り饗けよ

其の盛名は百世に垂れて朽ちざるべし。然りと雖も、國家が猶將來君に待つ所更に多大なるものありしを思へば、轉た痛惜の念禁ずること能はざるなり。余曩に乏しきを君の後に承けて當校に長たり。淺學不才にして、固より其の職に堪へずと雖も、一に君の施設に遵ひ、敢へて驚鈍を竭し、以て國家に對へ奉らん事を期せり。本校職員生徒、亦一意君の遺訓を體し、各其の本分を完うせんとす。希くは在天の英靈、永く本校の事業に冥鑑を垂れ給はんことを。君逝いてより茲に一周年、謹みて薰香時差の奠を具して、敬しく君の靈を祭る。希くは來り饗けよ。

(中川謙二郎、櫻蔭會雜誌より)



## 二〇 色彩

色彩は美術上極めて重要な地位を占め、特に繪畫にありては缺くべからざる要素なり。水墨畫若しくは鉛筆畫の如く、之を須もひざるものもあれども、繪畫の最大部分は色彩を施せるものなり。此の故に、色彩の性質、關係、結果等を研究することは、畫工の怠るべからざる所なり。其の他、建築、器具、服裝及び百般の裝飾品、一として色彩の調和を要せざるはなし。

陰鬱

主要なる色彩の中に於て、赤色と黒色とは正反對にして、赤色は快活の趣を有し、黒色は陰鬱ウツクの趣を有す。旭日の

(1) Chaucer 英國の文學者  
 〇〇一三四四〇 英國文學者

西山に春つ  
 歸雲を燬く

始めて昇るや、其の色赤くして金線亂射し、海雲悉く朱に染むが如し。世界萬物夜氣の爲に淨潔となれる後、赫々たる曉光を東天に望む時は、快活の感自らに起るものなり。詩人(一)チーサーは、東天皆笑ふの句を以て此の曉光を形容せり。これ直ちに快活の感を天地に付して、之を寫象せるなり。桃花若しくは杜鵑トウキョウ花の如き、赤色の花相簇りて咲亂るゝ時は、同一の結果を生ぜずといふことなし。晚秋の草木漸く黄ばみ凋む時に當りて、千山の紅葉一時に燃えて、天をも焼かんとす。これ一年中最後に得らるゝ快活の感なり。之を一日に比すれば、夕陽西山に春つハルいて烈火の如く、炎々として歸雲を燬くヤクの狀に同じ。



惹起

紅色は赤色より一層愛すべき所あり。淺紅色は猶一層愛すべき所あり。櫻花の爛漫として雲の如きも、淺紅色にあらざりせば、愛すべきもの少かるべし。但白にして未だ全く白ならず、紅にして未だ全く紅ならず、恰も雪に色あるが如く、僅かに淺紅色を帶ぶる處、愛すべきもの多しとす。雨中又は月夜の櫻花最も愛すべきが如し。紅色に反して、赤黑色は已に赤色の階級を過ぎて、陰鬱の方に近きものなり。人に譬ふれば、赤色は中年の如く、赤黑色は晩年の如く、紅色は青年の如く、淺紅色は幼年の如し。その間おのづから連想の存すること、決して否定すべからざるなり。黑色は赤色に反して、陰鬱の觀念を惹起す、偶深山幽谷

彷徨

を過ぐるに當りて、日已に没して天漸く暗ければ、おのづから不快の感を生ずべし。其の時煌々たる燈火を得ば、これを頼んで行くべしと雖も、若し不幸にして之を得ず、獨り暗黒の中に彷徨すと假定せば、其の不快果して如何ぞや。これ黑色が陰鬱の觀念を惹起すればなり。黑色は又悲哀の記號として喪服に用ひらる。蓋し、悲哀は陰鬱の程度を高めたるものなればなり。黑色は人目を射るが如き鮮明なる色彩にあらざるが故に、眞面目の意味もあり。禮服の黑色なるものあるは、蓋しこれが爲なり。要するに、黑色は五色中に於て最も裝飾的效力に乏しきものなれども、他の色彩と反對をなし、それをして愈顯著ならしむる價



長空蒼々  
積水渺々

値あるが如し。

青色は深遠悠久の趣あり。これ如何なる處より來るか。仰いで天を觀れば、長空蒼々として窮無し。俯して海を觀れば、積水渺々として碧なり。又曠野を眺め、遠山を望めば、草木皆合して一色を成し、眼界皆青し。殊に松葉の翠の如きは、耐久の意味を有す。かくの如く天地間の現象を觀察すれば、おのづから青色に深遠悠久の趣を附與する傾向を免れざるべきなり。然れども青色に深淺の別あり。淺青は又淺薄未熟の趣を有す。青黄色は衰弱の象にして、頗る淒氣を帯び來る所あるが如し。

淡遠  
淒氣

黄色はおもふに淡遠の趣あるにあらざるか。野外に咲

荒村籬落

きたる菜花の色のとき、おのづから其の趣あり。夕陽黄葉の景に至りては、尙一層其の然るを覺ゆ。荒村籬落の間に山吹の花の咲きたるが如き、世間を離れて別に淡遠の趣を存す。女郎花もしくは黄菊の如き亦然り。黄金に光澤の合一せるは、淡遠といふよりは寧ろ高遠の趣あり。黄色即ちこれなり。

塵俗を超脱す

白色は清淨潔白の趣あり。梅花の白うして雪の如くなる、高士の清節に比するを得べし。古より清廉の士、往々梅花を愛す。蓋し其の性の相似たるものあるが爲なり。雪後雲晴れて、月天心に高く、寒光梅を照す時、最も清淨潔白の感を惹起し、人をして殆ど塵俗を超脱する思あらしむ。又



木

二四三

刀劔露を湛

月前の梨花の如き、寒江の蘆花の如き、白雪の如き、皆潔白の意味より外にこれなかるべし。神道の儀式には、多くは白色の禮服を着く。これまた清淨潔白を尙べばなり。白色光澤を帶ふれば、凄氣を生ず。白眼にして人を睨むが如き、己に十分の凄氣あり。刀劔の露を湛へんとするが如き、月色の白うして氷に似たるが如き、いづれも凄氣を帶びざるはなし。

紫色は快活の深遠にせられたるが如き趣あり。其の他種々なる間色にも、それ〴〵特殊の意味あるべし。西洋にて各種の花に意味ありとして、所謂花語を成せるものは、主として色彩にもとづけるならん。然れども、これもと俗

原

三

習の致す所に過ぎざるが如し。

(井上哲次郎)

二一 謠曲—羽衣

ワキ一聲「風早の三穂の浦曲をこぐふねの、浦人さわぐ浪路かな。サシ、これは三保の松原に、白龍とまをす漁夫にて候。ッレ、<sup>(一)</sup>萬里の高山に、雲忽ちにおこり、一樓の明月に、雨はじめて晴れたり。げにのどかなる時しもや、春のけしき松原の、浪立ちつゝ、朝霞、月ものこりの天の原、及びなき身のながめにも、心空なるけしきかな。歌、<sup>(二)</sup>わすれめや、山路をわけて清見瀉、はるかに三保の松原に、たちつれいざや通はん。風向ふ雲のうき浪たつと見て、釣せて人や返るらん。

(一) 駿河國清水港の南に突出せる松原。三穂の浦曲をこぐ舟の浦人さわぐ浪路。波たつらわしむ。萬葉集七、作者未詳。  
(二) 千里好山雲乍斂。一樓明月。玉屑に見ゆ。  
(三) 忘れずよ清見が關の波間。より霞みて見ゆ。松(續古今集)中務卿。四風むかふ雲のうき波たつと見て釣せぬ。さきに歸る舟人。藤原爲相。



虚空

いかさま

待てしばし、春ならば、吹くものどけき朝風の、松は常磐の  
聲ぞかし。浪は音なき朝なぎに、釣人おほき小舟かな。ワキ詞  
「われ三保の松原にあがり、浦のけしきをながむる所に、虚  
空に花ふり、音楽きこえ、靈香四方に薫ず。これたゞごとと  
思はぬ所に、これなる松に、うつくしき衣かゝれり。よりて  
みれば、色香妙にして常の衣にあらず。いかさま、とりて歸  
り、古き人にもみせ、家の寶となさばやと存じ候。

シテ詞、なう、その衣はこなたのにて候。何しにめされ候ぞ。  
ワキ詞、これは拾ひたる衣にて候程に、とりて歸り候よ。シテ、そ  
れは天人の羽衣とて、たやすく人間にあたふべき物にあ  
らず。本のごとくにおき給へ。ワキ、そも此の衣の御ぬしと

奇特

とやあらん  
かくやあら  
ん

天人の五衰  
(五)は頭上花  
鬘忽萎、二は  
天衣塵垢所  
著、三は腋下  
汗出、四は兩  
目數胸、五は  
不樂本居。

は、さては天人にてましますかや。さもあらば、末世の奇特  
にとゞめおき、國のたからとなすべきなり。衣をかへす事  
あるまじ。シテ、悲しやな。羽衣なくては飛行のみちも絶え、  
天上にかへらんことも叶ふまじ。さりとは返したび給  
へ。ワキ、この御詞をきくよりも、いよく、白龍力を得、本より  
この身は心なき、天の羽衣とりかくし、叶ふまじとて立ち  
のけば、シテ、今はさながら天人も、羽なき鳥のごとくにて、  
あがらんとすれば衣なし。ワキ、地にまた住めば下界なり、  
シテ、とやあらん、かくやあらんと悲しめど、ワキ、白龍衣を返  
さねば、シテ、力及ばず、ワキ、せんかたも、地、涙の露の玉鬘か  
ざしの花もしをくと、天人の五衰も目のまへにみえて、



あさましや。

シテ「天の原、ふりさけみれば霞立つ、雲路まどひてゆく  
 へしらずも。地すみ馴れ  
 し、空にいつしかゆく雲  
 の、うらやましきけしき  
 かな。迦陵頻伽のなれな  
 れし、聲今さらにわづか  
 なる、雁が音の歸りゆく、  
 天路をきけばなつかし  
 や。千鳥、鷗の沖つ浪、行くか歸るか春風の、空に吹くまでな  
 つかしや。



迦陵頻伽

疑は人間  
にあり

ワキ詞「いかに申し候。御姿を見たてまつれば、あまりに御  
 痛はしく候程に、衣をかへし申さうずるにて候。シテ詞「あら  
 うれしや。こなたへたまはり候へ。ワキ「しばらく。承り及び  
 たる天人の舞樂たゞ今こゝにて奏し給はば、衣をかへし  
 申すべし。シテ「うれしや。さては天上にかへらん事をえた  
 り。此のよろこびに迎もさらば、人間の御遊のかたみの舞  
 月宮をめぐらす舞曲ありたゞ今こゝにて奏しつゝ、世の  
 うき人につたふべし。さりながら、衣なくては叶ふまじ。さ  
 りとては先づかへし給へ。ワキ「いや、此の衣をかへしなば、  
 舞曲をなさて、其のまゝに、天にやあがり給ふべき、シテ「い  
 や、うたがひは人間にあり。天に偽なきものを。シテ「あらは



霓裳羽衣の曲

づかしや。さらばとて、羽衣をかへしあたふれば、シテ「少女は衣を著しつゝ、霓裳羽衣の曲をなし、ワキ、天の羽衣風に和し、シテ「雨にうるほふ花の袖、ワキ、一曲をかなで、シテ「舞ふとかや。地「東遊の駿河舞、この時やはじめなるらん。

地「それ、久かたのあめといつば、二神出世のいにしへ、十方世界をさだめしに、空は限りもなければとて、久かたの空とは名附けたり。シテ「サシ、然るに、月宮殿のありさま、玉斧の修理とこしなへにして、地「白衣、黒衣の天人の、數を三五に分つて、一月夜々のあま少女、奉仕を定め役をなす。シテ「われも數ある天少女、地「月のかつらの身をわけて、假に東のするが舞、世に傳へたる曲とかや。クセ「春霞たなびきに

玉斧の修理

南地 東遊 南地

五郎の舞

(六)拾遺集、讀人不知

けり。久かたの、月のかつらも花やさく。げに花かづら色めくは、春のしるしかや。おもしろや。天ならで、こゝも妙なり天津風、雲の通ひち吹きとちよ。少女の姿しばしと、まりて、此の松原の春のいろを三保がさき、月清みがた、富士の雪、いづれや春の曙。たぐひ浪も、松風も、のどかなる浦のありさま。その上、天地は何を隔てん。玉垣の内外の神の御すゑにて、月も曇らぬ日の本や。シテ「君が代は、あまの羽衣まれに來て、地「撫づとも盡さぬ巖ぞと、聞くも妙なり東歌。聲そへて、かづくの箏、笛、琴、篋、孤雲の外に満ちく、て、落日の紅は、蘇命路の山を寫して、緑は浪に浮島が、拂ふ嵐に花ふりて、げに雪をめぐらす白雲の袖ぞ妙なる。シテ「南無

(七)笙歌遙聞孤雲上、聖來大迎落日、聖來大(八)江定基の詩、大は青く、東白西南、北は黄、西に南、めいるの山。(紫式部)



蘇命路の山  
本地

歸命月天子本地大勢至。地東遊の舞の曲。シテ、ソキ、あるひは、  
 天つみ空の緑の衣。地、または春立つ霞の衣。シテ、色香も妙  
 なり少女の裳。地、左右左、さいう颯々の花をかざしの天の  
 羽袖、なびくもかへすも舞の袖。舞、東あそびのかずくに、  
 その名も月の色人は、三五夜中のそらに又、満願眞如の影  
 となり、御願圓滿、國土成就、七寶充滿の寶をふらし、國土に  
 これをほどこし給ふ。さる程に時移つて、天の羽衣浦風に、  
 たなびきたなびく三保の松原、うき島が雲の、あしたか山  
 や、富士の高嶺かすかになりて、天つみ空の霞にまぎれて  
 うせにけり。

七寶  
 金銀瑠璃  
 珊瑚  
 琥珀  
 瑪瑙  
 水晶  
 瑪瑙  
 琥珀  
 瑪瑙  
 水晶

(九愛鷹山)

### 二二 音樂

曲節

試に一曲の歌謠を聴け。吾人は之によりて得る感興に  
 二要素あるを發見すべし。一は其の歌謠の意義が我が心  
 を動かすものにして、一は其の音聲の高低、緩急、抑揚、強弱、  
 概言すれば其の曲節が我が情を刺衝するものなり。  
 さて、歌謠をなせる言語の意義は、文字に寫して目之  
 を見るも、亦よくこれを解するを得。其の音樂的要素にあ  
 らざるや論なし。されば歌謠のよく音樂たるは、一に其の  
 音聲の曲節に存すること明かなり。而して、曲節は言語よ  
 り其の意義を除去したる聲音の上にある。かく言語をな



さざる聲音は、即ちまた樂器の依つて立つ所以の基礎なり。

悠揚 急迫  
扞格

吾人は固より聲音其のものに一種の快美を感じず。これ恰も色彩其の物を見て喜ぶと同じ。一つの音が耳に快くして、他の聲が快からざるは之が爲なり。されど、吾人は別に此の感覺的快美の感より、進んで其の音聲に何等かの表象あるを感じるなり。其の或は高く昂り、或は低く沈み、或は悠揚として長く、或は急迫にして短き、一々皆吾人の心情と相應するにあらざるは無し。吾人は且く之を名づけて情を含める聲音といはん。此の聲音は人々皆其の軌を一にして、互に扞格する事なきが故に、吾人は耳に他人

蟲吟鳥語  
松韻濤聲

表徵

形式

の聲音を聽いて、心直ちに之を感應し、敢へて謬ることなし。而して此の如き關係は、廣く之を推して、あらゆる聲音に及すを得べし。蟲吟鳥語の如き、松韻濤聲の如き、若しくは金石相撃ち、風絃相鳴るが如き、自然界の聲音に對し、人の之を聽いて且泣き且笑ふは、皆之と理を同じうす。畢竟言語をなさざる音聲に、吾人心情の表徵あればなり。器樂の根本原理は實にこゝに存す。器樂は此の如き音聲の醇なるものを選び、粹なるものを取りて、所謂樂音なるものを定め、絲竹管絃を假りて之を出さしめ、藝術に必須なる形式を之に附與して、複合構成せるものなり。而して其の資料たる音聲と、之を構成する形式とは、皆吾人の情生活



(1) Symphony

塵寰

懊惱

神祕なる琴線

に相應じて、一々其の表徴たるものならざるはなし。月夜にふきすさぶ一管の笛聲よりシムフォニーの大絃樂に至るまで、人の之を聽いて、或は泫然として涕をたれ、或は肅然として襟を正し、或は心神朗徹、遠く塵寰を脱して直ちに天地と冥合する感を生じ、或は煩悶懊惱の思をなし、我と樂と融合化一して、樂聲の入つて我が心情となれるか、はた我が心情の化し去つて彼の樂聲となれるかを疑ふに至るもの、其の源は實にこゝにあり。要するに、器樂の樂聲は人の聲なり。人心の最奥處に潜める神祕なる琴線の動ける反響なり。

されど、言語をなさざる音聲は、特殊の意義を有せざる

嗚咽

が故に、器樂の表象する感情は、一般的抽象的たるを免れず。例へば此處に悲哀の情を託せる一曲あり、吾人は之を聽いて涕泣嗚咽するを禁ずる能はず。樂曲の効果はかくて足れり。されど、其の悲哀は何の故に生じたる何様の悲哀なるかは、吾人遂に之を知ること無し。歡喜、平靜、苦悶すべて皆かくの如し。器樂のあらはすところは、特殊の人が特殊の境遇に於ける特殊の感情にはあらざるなり。若し此の如き感情の表象を望まば、吾人は之を言語に求めざるべからず。之を詩歌に求めざるべからず。

更に他の方面より之を見る、人の感情は境によりてあらはれ、自然界の現象に應じて變化す。春和景明、風暖に霞



心神暢快

Science  
サイアス

旋律

たなびき、小川の流緩うして岸邊の柳緑なり。人此の光景に對すれば、氣暢び、心ゆるやかにして、我亦雙肩胡蝶の翼に化し、翩々として彼の菜花に戯れんとする思あり。器樂はよく此の心神暢快の感をあらはすを得ん。されど、其の霞たなびける狀、小川の流るゝ狀、もしくは春風ゆるやかに柳條を梳る狀をばうつす能はず。此の如き敘述はまた之を言語に求めざるべからず。之を詩歌に求めざるべからざるなり。

是に於てか聲樂あり。聲樂は言語をなせる人聲、即ち歌詞に旋律ある曲節を附せるものにして、詩歌と音樂との結合せるものなり。

(音樂通解による)

二三 我が國の繪畫 その一

日本畫と西洋畫とは漸次混融して、その區劃も明瞭ならざるに至るが如しといへども、この兩者の純粹なるものを比較すれば、各自の特色は尙甚だ顯著なり。音に絹紙と彩具との相違のみならんや。その用意筆法等に於て皆然り。彼にあつては藝術は科學と並行し、理性は想像の銜となりて、遠近明暗つとめて自然に背かざらんことを期し、此にあつては文化の精神的方面、獨り先づ進み、筆を揮ふもの感興に乗じて、腦裏の印象を瀉ぎ出す。彼は色彩を旨とし、此は描線を重んじ、彼は實相の通りに空氣の色を

腦裏の印象

理性は想像の銜

美術  
詩歌  
繪畫  
彫刻  
建築  
演劇







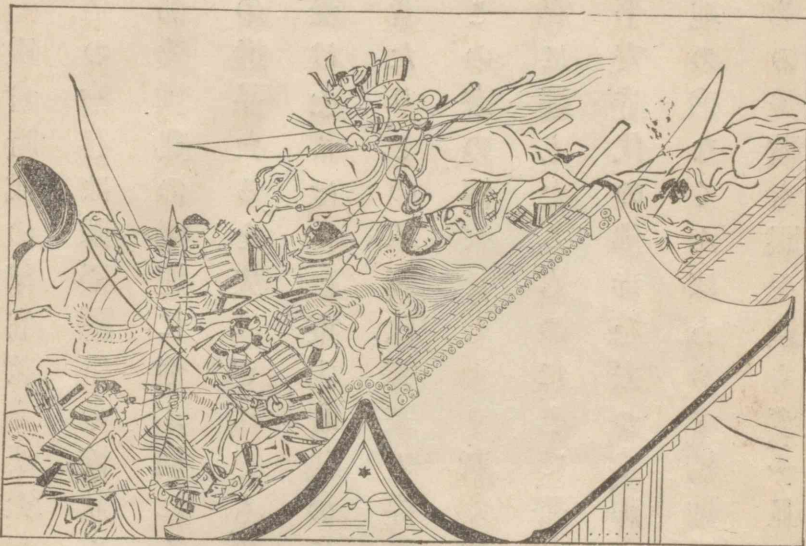




提擲  
教外別傳  
以心傳心

雲烟萬里

蒼枯にして  
恬澹  
破墨一掃



平家物語卷繪物

像何の要かあらん。教外別傳といひ、以心傳心といひ、精神を主として形體に泥まず。例へば能樂に何等の背景を設けずして、しかも能く雲煙萬里の情趣を偲ばしむるが如し。繪畫もこれに同じく、色を棄てて筆に託し、巧を抛ちて氣を驅り、蒼枯にして恬澹破墨一

神工  
吾我を忘る

流風餘韻

(一)〇秀吉が伏見桃山城にて天下を治めたる時代。  
雄大穠麗

枯淡  
(二)狩野探幽の信。雪舟の意。派を學びて。寵遇を受く。元天皇延寶四年(一六三三)歿す。三十三(三)住吉廣道の

掃して遠山を産み、秃筆數行にして樹石を刻む。一見すれば、兒戲熟視すれば神工、益味うて益趣あり。恍惚として吾我を忘る。即ちこれ東山時代の特色にして、流風餘韻延いて近代に及べり。

(四)桃山時代は豪華の氣一世を蓋ひ、繪畫もやゝ移りて雄大穠麗の風を喜べども、未だ東山の根據を衝くに及ばざりき。江戸時代に至つて幕府が消極の方針は、更にその規模を縮めて、枯淡の域に歸らしめ、門閥の貴きに誇れる狩野、住吉も、先人の糟粕を嘗むるのみ。元祿の盛時には、裝飾に傾ける光琳、滑稽の才ある一蝶あり。菱川師宣以來の浮世繪が時勢粧を寫し、山水花鳥以外に題目を求めたるは







(四)能登守平教

(五)後鳥羽天皇  
文治二年(一  
八四六)のこ

(六)藤原秀衡

陸奥出羽の押

領使基衡の押

子。嘉應二年

鎮守。府將軍と

なる。頼朝を頼みて

經彼を頼みて

三人卒す。文治

(七)高倉天皇の

紀元。二年は

軍の時、義經がために命を捨て、能登殿の矢先にあたりて  
亡せしかども、これまで御邊のつき給ひたれば、繼信も兄  
弟ながらいまだ有る心地こそしつれ。年のうちは思へば  
いく程もなし。人も命あり、われもながらへたらば、明年の  
睦月のすゑ、二月初には陸奥へ下らんずれば、御邊も下り  
て秀衡をも見よかし。又信夫の里にとゞめおきし妻子を  
も、今一度見給へかし。と仰せられければ、さうけたまはり  
候ひぬ。治承二年の秋の比、陸奥を罷り出で候ひし時も、今  
日よりして君に命をたてまつりて、名を後代にあげよ。矢  
にもあたり死しけると聞かば、孝養は秀衡が忠を致すべ  
し。高名度々におよばば、勳功は君の御計らひとこそ申し

今日は人の  
上明日は身  
の上

(八)辨慶。

綸言

含められしか。命を生きて故郷へ歸れと申したることも  
候はず。信夫にとゞめ候ひし母一人候も、其のときを最後  
とばかりこそ申しきりて候ひしか。弓箭とる身の習、今日  
は人の上、明日は我が身の上、皆かくこそ候はめ。君こそ御  
心弱くわたらせ給ひ候とも、人々それよき様に申させ給  
ひ候へや。とぞ申しける。武藏坊これを聞きて申しけるは、  
「弓矢取る者のことばは綸言におなじ。言葉に出しつる事  
を、ひるがへす事は候はじ。只心やすく御暇を賜はりたし。」  
とぞ申しける。判官暫く物をもおほせられざりけるが、や  
やありて、惜しむとも叶ふまじ。さらば心にまかせよ。とぞ  
仰せられける。忠信承りて嬉しく思ひて、たゞ一人吉野の



九夏三伏

奥にぞとゞまりける。されば、夕には月星の光をいたゞき、朝には教訓の霧をはらひ、立冬素雪の冬の夜も、九夏三伏の夏のあしたにも、日夜朝暮かたときもはなれ奉らず、つかへ奉りし御主の御名残も、今ばかりなりければ、日比は坂の上の田村鷹、藤原の利仁にも劣らじと思ひしが、遠に今は心細くぞ思ひける。十六人の人々も、面々にいとまごひして前後不覺になりけり。又判官忠信を近く召して、太刀と鎧とを賜ひ、故郷に思ひおく事はなきか。と仰せられければ、我も人も衆生界のならひにて、などか故郷の事を思はざらん。國を出でしとき、三歳になり候を、一人とゞめ置きて候ひしぞ。彼の者に心付きて、父はいづこにやら

九夏三伏  
 初伏  
 中伏  
 末伏

九桓武天皇朝の有名なる武將。延暦二十一年征夷大將軍となりて、大坂を征して、大坂を破り、大坂を占領す。皇弘仁二年薨す。年五十四。

(一) 陸奥國の磐井郡、今西平泉村、藤原清衡以、藤原の居城。

んと尋ね候ふべきなれば、聞かまほしく候。平泉出でし時、君ははや御立ち候ひしかば、鳥の啼きてとほるやうに、信夫を打ちとほり候ひしに、母の所に立ちより、いとまごひ候ひしかば、齡衰へて、二人の子供の袖にすがりて、悲しみ候ひし事、今の様におぼえ候。老のするになりて我ばかり物を思ふ、子供に縁のなき身なりけり。信夫の庄司に過ぎ別れ、たまゝ近付きて不便にあたられし伊達の娘にも過ぎ別れ、一方ならぬ歎なれども、和殿原を成人せさせて、一所にこそなけれども、國のうちにあると思へば、頼もしくこそ思ひつるに、秀衡何と思召し候ふやらん、二人の子供どもを、皆御供せさせ給へば、一旦の恨はさる事なれど



血をあへす

も、子供を成人せさせて、人數に思はれ奉るこそうれしけれ。隙なく合戦にあふとも、臆病のふるまひして、父の屍に血をあへし給ふなよ。高名して、四國西國のはてにおはすとも、一年二年に一度も命のあらんほどは、下りて見もし見えられよ。一人とゞまりて、一人たえたるだに悲しきに、二人ながら遙々とわかれては如何せん。』とて、聲も惜しまず泣き候ひしを振捨てて、『さ承り候。』とばかり申して、打出で候より以來三四年終におとづれも仕らず。去年の春の比わざと人を下して、繼信討たれ候ひぬと告げて候ひしかば、身も絶えなんと悲しみ候ひけるが、繼信が事はさて力およばず、明年春のころにもならば、忠信が下らんとい

(一)後鳥羽天皇  
 (二)永三年  
 (三)八四四の  
 こと

ふ嬉しさよ。はや今年の月日も過ぎよかしなどと待ち候なるに、君の御下り候はば、母にてさぶらふ者、急ぎ平泉へ参り、忠信はいづくに候ぞと申さば、繼信は屋島、忠信は吉野にて討たれけると承りて、いかばかり歎き候はんずらん。それこそ罪深くおぼえて候へ。君の御下り候て、御心安く渡らせおはしまし候はば、繼信、忠信が孝養は候はずとも、母一人不便の仰をこそ預りたく候へ。』と申しも果てず、袖を顔におし當てて泣きければ、判官も涙を流し給ふ。十六人の人々も、皆鎧の袖をぞ濡しける。

二六 俳句の感興



發句は形短けれど、餘情ありて玩味すべきもの多かり。

早少女や泣く子の方へ植ゑて行く  
わかれても闇に見にくる職かな

此の句どもを吟ずれば、親の子を思ふ情思ひやらる。

すれくの中に花咲くとくさかな

此の句は豊後國のある片山里に、貧しく暮して子一人も  
てる夫婦ありけるが、何やらん心に違ふことありて、を  
こかの女房を離別しければ、女房悲しく思ひて、さま  
わびけれども聞入れざりければ、止むことを得ず家を立  
出づる時、此の句をいひ出でしかば、夫感得して呼戻せり  
となり。

靈供

遠江國天龍川の邊に老いたる賤の男、孫を失ひて其の  
翌年の七月于蘭盆といふに、彼の孫が位牌に靈供を備ふ  
とて、

去年まで叱つた瓜を手向かな

此の句を吟ずれば、恩愛の情、涙も落つるばかりなり。

其角は、

夕立や田をみめぐりの神ならば

にて雨をふらし、不角は、

頼政がひろひ残し、しひもがな

にて位にすゝめり。其の道の蘊奥に至りては、歌も、句も、人  
情を和ぐる所格別の相違あるべからず。

(一)姓は戸羽。  
江戸の俳人。  
江戶の俳人。  
純園天皇寶曆  
三年(二)四一  
三)歿す。曆  
六十二  
年



(二)連歌の名  
家紀伊の人  
後柏原天皇文  
龜二年(一一  
六二)函根湯  
八十二  
本に歿す。

去りし年、總州邊にて俳諧を好む獨者の方へ盜賊入りて、器財悉く盜み取れり。彼の俳人を手厳しく柱にくゝり附けてちつとも動かせず。俳人のいふやう、我少しの望あり。今かくの有様になれば、金錢財寶一つとして惜しからず。しかし一つの願あり、笈の内に入れ置きたる宗祇自筆の伊勢物語と、床の間に置きたる末の松山の文臺とをば我にあたへ給へ。といひければ、賊魁聞届けて、さもあらけなく取出して投げやり、俳人の繩目をゆるして、盜賊どもは出行きけるが、さるにても、只今彼が乞ひたる書物と文臺とは結構なるものにや、立歸りて奪ひとらんとて、戶外に佇みて内の様子を伺ひけるに、俳人は屈する色もなく、

狼藉

(三)古今和歌集  
の序に、天地  
の地を動かして、  
目に見えぬ鬼  
神はあはれと  
思はせ、男女  
の心中、猛き  
げな心、武士  
の歌なり。

燈かきたてて、筆と紙とを手に持ちながら、ぬす人もあととざし行く夜寒か。なとくり返し、獨り吟じおけるに、盜賊等此の句にめで大いに感じ、今宵奪ひとりたる道具どもを悉く返し與へ、かゝる無欲なる面白き人とは知らず狼藉したりとて、金を多く與へけるを、あへて取ることなかりしが、四五日も立ちて、いづくよりともなく、樽肴に熨斗包添へて、竈の前におきて歸りけり。察する處彼の盜賊等のわざなりしなるべし。  
實に其の道に至りては、鬼神をも感ぜしめ、猛き武士の心をも慰め、男女の中をも和く。わづかの一端とはいひな



がら、其の感應深く思ふべし。

(雨窓閑話)

### 二七 社會と家庭

平和の頌詞

それ社會は口に平和の頌詞を歌ひつゝ、手に戰鬪の劍を揮ふ。一面愛すべくして、一面また恐るべし。

適者生存

理想をいへば、人皆博愛平和をいふ。しかも目を舉ぐれば、四方上下競争ならざるはなく、所謂優勝劣敗、適者生存の生物界なり。しかのみならず、逐日文明の進歩は競争の劇甚を致し、二十世紀の今日においては、寸分の油斷ある者忽ち失敗廢滅の運命に遇ふ。たとへば競走の遊戯の如きか。啻に各人の大小、強弱、巧拙が勝敗の數を定むるのみ

修羅場

ならず、靴紐の緩みしも亦尙これにあづかるなり。人は天然と鬪ひ、同胞と鬪ふ。而してその鬪や劇烈殘酷、毫も假借するところなし。之を修羅場といふも、亦不可なきに似たり。

然れども、これ只一面のみ。見よ、平和安寧は自ら此の中において發生し、生長し、成熟しつゝあるなり。外に對する競争は必ず内の團結を堅くするのみならず、競争者相互の間においても、競争は必ず協同の利を知らしめ、同情の心を廣めて、遂に人類をして次第に一和するに至らしむ。同國人が諸種の關係上同心協力するは更にも云はず、實際上においても、工藝、美術、文學、科學を共有し、共樂し、救濟



藩籬

慈善の事業に藩籬を設けざらんとする傾向あるは明らかなり。これ豈極樂にあらずして何ぞ。

誣ふべからず

之に對する聖賢の解釋は如何にもあれ、社會の實際に是等の二面あるは事實なり、誣ふべからず。而して人各之に對して處するの道無かるべからざるなり。

權謀術數  
排陷擠害  
靜穩安樂なる  
港灣

今それ、社會はすべて競争なり。見よ、政治社會に權力の争あり、實業社會に利益の争あり。眞と美とを事とする文藝、學術の社會にも亦一種の争なき能はず。而して競争の勢は多く權謀術數を弄し、反間中傷を試み、時に排陷擠害の慘を極むるに至る。之を風波吹荒める大洋に譬ふべし。此の中を航するものは、必ず時々靜穩安樂なる港灣を求

めて寄泊せざるを得ず。此の港灣こそは即ち我等が家庭にはありけれ。

佳氣堂に満つ

家庭は世の輕薄、煩勞、奮闘、危險、痛恨、苦悶よりの避難所なり。此處には野心も既に其の力なく、虚榮も其の光なく、貪慾も其の用なし。而して只休息あり、平穩あり、安樂あり、天真あり、清新の佳氣堂に満つ。こゝにおいて、敗れたる者其の苦を忘れ、怒れる者其の氣を和げ、失望せる者其の希望を得、倦疲れたる者其の元氣を恢復するに至る。廣き世間に風吹かば吹け、波立たば立て、人は別に獨立せる我が領土を確有し、曾て他人の一指も之に觸るゝを許さず。これを家庭となす。

獨立せる我が領土



水をも洩さず

家庭に於ては至深なる同情、至厚なる信任固く相互を結び付く。而して其の間曾て水をも洩さざるなり。世に二つ無き父母の恩愛此處にあり。我が身の一半たる夫も、第二の我たる兒女も、共に此處にあり。以て喜憂を同じうし、希望を同じうす。誇とすべき姉妹、頼とすべき兄弟、共に此處に思を繋げ、無邪氣にして愉快なりし年少の記憶も、遠大にして架空なりし青春の希望も、亦永く此處に留る。其の愛すべく樂しむべきは固より言ふまでも無きなり。

社會の形體

家庭は又國家より見れば至重の教育所なり。此處には其の小模型内に一切社會の形體を具ふ。君臣あり、子弟あり、賢愚あり、朋友あり、男女、老幼、強弱あり。慈愛、正義、服從、勤

架空なりし青春の希望

賊害

勉、信任、溫和、禮儀等の諸徳皆此處に養はれざるはなく、政治、經濟、衛生、宗教、教育、殖産、學問、文藝、娛樂等の事皆此處に行はれざるはなし。凡そ社會の人が有する徳と、爲す事業とは皆此の中に存す。忠孝一途とはこれをいふなり。  
家庭において嚴正なる秩序あり、善良なる習慣あり、公明正大なる意氣精神ある時は、兒女は何時となく、全く之に感化せらる。而して其の幼時教育の品性上における效驗の偉大なるは、實に將來高等の學校を経て學ぶに勝るものあるなり。  
之に反して徳薄く、才拙く、罪惡を犯して世を賊害する者の多數は、もと家庭無かりしか、或は不良なる家庭に生



鹽梅料理  
獻身的の愛

長せし不幸の人間なり。この故に、社會の改良も、國家の進歩も、其の淵源を家庭に發するの理尤も明らかなりといふべし。されば、社會國家における家庭の位地の貴きと同時に、之を鹽梅料理する女子の責任の大にして、煩勞苦心の多きも亦知るべし。これ女子の本領をば、獻身的の愛にあり。といふ所以なり。(加藤弘、之中島、徳藏、明治女子大學による)

男子の昔をしのび

をみなへしの一時をくねる

をみなへしの一時をくねる

をみなへしの一時をくねる

をみなへしの一時をくねる

をみなへしの一時をくねる

二八 某女學校生徒の卒業を祝ふ文

をみなへしの一時をくねるといひけん昔は知らず、今の大御代は萬と、のほりて、男はいふも更なり、女も物學びせぬものぞなきや。今日はしも姫君たちのこの學校の

御しりへの政ふりはへおはす

おもたゞし

こめかしく

學びのわざをへつるとして、さる式場をまうけて證書を授けられぬが、ることば、よのつねなるだに花やかなるを、ましてかしこきみかどの御しりへの政きこしめす皇後宮の、ふりはへおはしまして見そなはし給ふなるは、いかにかたじけなく、おもたゞしき事ならずや。さるは姫たちの、常にいそしみつとめて、才の勝れたればこそと人々ほめの、しるに、おのれいさ、かことざまなるほぎ言を申さんとす。いでや今の世の中、よろづに外つ國の手ぶりにならひて、女は男に劣らぬものとして、立居ふるまふさまより、物いふけはひにいたるまで、こめかしくなつかしき事はなくて、あら、しくのみなりゆくめるは、ありこし



うたてし

我が國風にも違ひて、うたてしきしわざなりや。むかし紫のおもとが日本紀の局といはるゝばかり才はすぐれながら、打見るには物をものはかゝしくえいはぬさまして、少しも才がりたるさまは見えざりきとなん。さておもとみづから書けるものにも、なま學びにおり立ちて、いさゝか思ひあがれる心にかたき書のこゝろをもいひじろひて、男をもこらしめ、眞字をさへ點長にはしりかきて、ほこらしげなるなどは、えせぬものしわざなりとおとしめたりき。昔だにかゝるを、まして今の世のちりにそまぬは、いとかたきわざながら、さるふしを立てんをこそ、まことの女とはいはめ。當時もいへりし如く、よろづまめやかに

才がる

人々相手はあつた天又相  
手はあつた天又相  
こころをヨツリし  
人々相手はあつた天又相  
手はあつた天又相  
こころをヨツリし

つきくし

うしろみて公私につけて、男の思ひあまれる事をもいひ合せて、かひなからず、幼き兒をもつきくしくはぐゝみ立てたらんは、家に國にこよなきいさをならずや。さてもおだしくなつかしきさまは、紫のおもとの如く、みやびかに優れたるさまは、清原のおもとの如く、徳も才もかねたらんが、數あらはれ出でたらんには、この校の光のみならず、秋のみ山の高さ大み心にも、いかによろこほひおはしまさん。今日の御式の庭の花やかにしてうれしきあまりに、かくは申すにこそ。

(久米幹文、水屋集)

秋のみ山の  
高さ大み心

おだし

久米幹文、水屋集



本館第四學年 武田以子

武田以子

武田以子

武田以子

武田以子

武田以子

武田以子

改訂新定女子讀本卷八終

大正四年一月十一日  
大正三年十二月二十七日  
大正二年三月二十七日  
大正元年三月二十七日  
大正元年三月二十七日  
大正元年三月二十七日

發行所  
印刷者  
發行所  
印刷者  
發行所  
印刷者  
發行所  
印刷者  
發行所  
印刷者  
發行所  
印刷者  
發行所  
印刷者  
發行所  
印刷者

(改訂新定女子讀本)

定價	全八冊
價	各金貳拾六錢

編者 文學博士 芳賀矢一

發行所 東京市神田區裏神保町九番地 富山房

右代表者 合資會社 富山房 坂本嘉治馬

印刷所 東京市本所區番場町四番地 凸版印刷株式會社本所分工場

發行所

東京市神田區裏神保町九番地

合資會社 富山房

長電話本局一〇三六、本局四一三〇番 振替口座 東京五〇一〇番



本科第四學年 武田以子





春  
花  
集

28  
3180  
1/2

武  
田  
庵